F83-P97-9bウ
1200500765388
F83
P97
9b

925

スペードの女王

他一篇

プーシキン作
神西清譯

×
複
写

岩波書店

始

F83
P97
9b

岩波文庫
925

スペードの女王

他一篇

プーシキン作
神西清譯

岩波書店

1016
98

目次

スペードの女王……五
ピョートル大帝の黒奴……六三
解題……一一〇
略註……一二八

スペードの女王

スペードの女王は悪しき下心をしめす。

『新板骨牌占ひ』

お天氣の　わるい日は
皆の衆
　寄り合つて
五十から　穴かしと
百兩と
　場を張つた
當つたり　外したり
白墨で
　しるしたり
お天氣の　わるい日の
皆々の
　稼ぎはこれ★

或る日のこと、近衛の騎兵士官ナルーモフの所に、骨牌の寄合ひがあつた。さすが長い冬の夜も知らぬ間に過ぎて、明け方になつた。朝の五時近く夜食の卓を囲んだ。勝つた者は大いに食慾を見せたが、でない者は茫然として、空つぽの皿に對してゐた。やがて三鞭酒が出ると話ははずみ出し、口を開かぬ者はなかつた。

「スーリン、君はどうだつたね」と主がたづねた。

「例によつて例の如しさ。僕はつまり運がないのだね。ミランドール★をやるときにしろ、僕は一度だつて昂つたことはない、ちつとも冷靜を失ひはしない。でもやつぱり駄目さ。」

「だが君はちつとも釣られなかつたね。一度だつてルテ★を張らなかつたぢやないか。……君の意固地にはほとほと恐れ入るよ。」

「ところで、ゲルマンはどうだ」と客の一人が、年若な工兵士官を指して言つた、「生れてこのかた、骨牌札に手を觸れたことも、ましてや賭勝負なんか一ぺんだつてやつた事もない癖に、五時までも坐り通して、われわれの勝負をぢつと見てゐるのだからね。」

「勝負はとても好きなのです」とゲルマンは言つた、「ただ僕は、餘分な金を手に入れようとして、入用な金が投げ出せる身分でないまでです。」

「ゲルマンは獨逸人なり、故に勘定高い。それだけの話さ」とトムスキイが喝破した、「だが、およそ不可解と言つたら、お祖母さんのアンナ・フェドトヴナ伯爵夫人だ。」

「それは、どう言ふ譯かね」と皆が口々に叫んだ。

「僕にはどうしても呑み込めないのだ」とトムスキイは續けた、「一體なぜお祖母さんが骨牌をやらないのか。」

「ちつとも不思議はないぢやないか」とナルーモフが言つた、「八十婆さんが骨牌をやらないだつて。」

「ぢや君は、あの人のことをちつとも知らないのだね。」

「ああ、何にも知らない。」

「よし、ぢや聽きたまへ。まづ知つて置いて貰ひたいのは、六十年ほど昔お祖母さんは巴里へ行つて、あそこの人氣の的だつたことだ。モスクヴァのヴィナスを拜まうといふので、皆が後を蹤け廻したものだ。リシュリュー★までが懸想した。何でもお祖母さんの話だと、餘りの無情さに、流石の彼も自殺をするしないの騒ぎだつたとか。あの頃の婦人連はファラオン★をやつたものだが、或るときお祖母さんは宮中の骨牌會で、オルレアン公★と爭つてそれこそ散々な負け方をしてしまつた。歸つて來ると黑の面紗を脱ぎ籠骨を外しながら、お祖父さんに負けを打明けて

支拂を命じた。僕の記憶するかぎり、亡くなつたお祖父さんは、まるでお祖母さんの家令みたいな風だつたからね。お祖父さんはお祖母さんを火のやうに怖れてゐたのだが、今度の飛んでもない負け高を聞くといよいよ勘忍袋の緒がきれたと見え、算盤を持ち出して來て、半年のうちに五十萬も使ひ果したの、巴里にはモスクヴァ近在やサラトフ縣みたいな地所は無いのと言つて、きつぱりと撥ねつけたのだ。するとお祖母さんはお祖父さんの頰桁にひとつ喰はして、私は憤つてゐますよといふしるしに、その晩はさつさと別間で寢てしまつた。翌る日になると、お祖母さんは良人を呼びつけた。内心はこの夫婦生活の罰の效目を當てにしてゐた譯だが、どうして相手は自若たるものだ。そこで生れてはじめて己れを屈して、良人の前に理窟を並べたり、言ひ譯をしたりした。言葉つきからしてずつと卑下つて、借金にも色々と種類のあること、公爵と馬車大工とは一緒にならぬことを、分らせようとかかつた。だが、いつかな聽かばこそだ。お祖父さんは本當に反旗を飜してしまつて、駄目の一點張なのだ。お祖母さんは途方に暮れてしまつた。が幸ひなことに、彼女は或る非常に有名な人物と昵懇だつた。君たちはサン・ジェルマン伯★の話を聞いたことがあるかね。色々な噂話の種になつてゐるあの人物さ。漂泊へる猶太人を氣取つて、長生藥や仙丹の發見者を以て自ら任じてゐたことは、君たちも知つてゐるね。世間では山師だと莫迦にしてゐたが、カサノーヴァはあの『回想錄』★のなかで、本當は間諜だつたのだと書いてゐる。が兎に角、その神韻飄々たる生活にも似ず、サン・ジェルマンは堂々たる威容をつくり、社交界に出ても頗る慇懃を極めてゐたらしい。お祖母さんは未だに渝らぬ敬愛の念を抱いてゐて、彼のことを悪くでも言はうものなら、ひどく腹を立てるのだよ。お祖母さんは、サン・ジェルマンが巨額の金を意のままに出來ることを知つてゐた。で、彼の助力を仰ぐことにきめて、即刻お越しを願ひたいと書いて使に持たせてやつた。奇體な老人は間もなくやつて來たが、見るとお祖母さんはひどく悲歎に暮れてゐる樣子ぢやないか。彼女は、ありたけの黒繪具を絞つて、良人のむごい仕打を描いて見せた擧句に、今となつては貴方の友情と御親切に頼るほかはありませんと結んだ。サン・ジェルマンは暫らく考へ込んでゐたが、やがて、『奥さん、そのお金を御用立てするのは譯もないことですが』と言つた、『ですが、それを私に御返濟なさるまでは、やはりお心は休まりますまい。貴女を今の苦勞から出して差上げるのはいいが、また別の苦勞をお掛けするのも私の本意ではありません。もつとよい遣方があります。それは、負けをお取返しになることです。』『でも、伯爵樣』と、お祖母さんは答へた、『私どもにはもう一文のお金もないと申上げたでは御座いませんか。』『いや、お金は少しも入りません』と、サン・ジェルマンは言ひ返した、『まあ、私の申上げることをお聽き下さい。』そこで彼は、お祖母さんに或る祕傳を授けた。これが知れることなら、僕たちみな金に絲目はつけまいにね。……」

若い賭博者たちは一齊に聽耳を立てた。トムスキイはパイプに火を移し、悠然と一吸ひくゆらして、あとを續けた。——

「その夜お祖母さんの姿は、ヴェルサイユに催された王妃の骨牌會にあらはれた。オルレアン公が元締だつた。お祖母さんは、まだ借りを拂はぬことを一言二言詫びて、申し譯にちよつとした作り話をやつてから、彼を相手に骨牌を闘はせはじめた。彼女は三枚の札を選んで、一枚一枚と賭けて行つた。三枚ともソニカ勝ち★となつたので、お祖母さんは物の見事に負けを取り戻してしまつた。」

「まぐれ當りだ」と客の一人が言つた。

「お伽噺さ」とゲルマンが指摘した。

「札に仕掛があつたに極つてる」と三人目が調子を合せた。

「僕はさうは思はない」と、トムスキイは重々しく答へた。

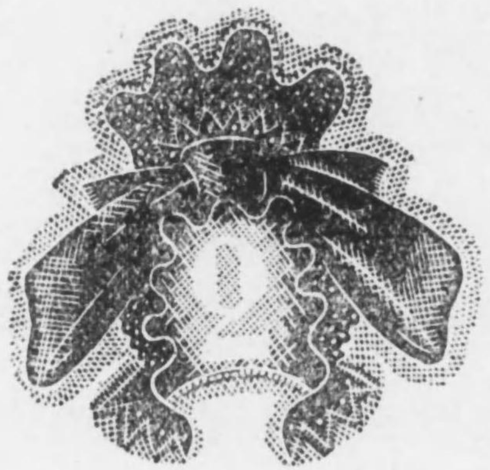
「だが、どうした事だ」とナルーモフが言つた、「三枚も立續けに當てるお祖母さんが現にありながら、今の今までその祕密がつかめないなんて。」

「さう、實に殘念だよ」と、トムスキイは答へた、「お祖母さんには息子が四人あつて、僕の父もその一人なのだが、みんな骨牌にかけては望みのない連中ばかりだつた。だのにお祖母さんは、

その一人にだつて祕傳を授けなかつたのさ。祕傳を授かれば、父や伯父さんたちは固より、僕だつて惡からう筈はないのにね。だがここに、伯父のイヴァン・イーリイチ伯が僕に話してくれた事があるのだ。伯父さんは正銘僞りのない話だと言つてゐたがね。死んだチャプリツキイ、何百萬と使ひ果したあげく乞食同然の死に方をしたあの男が、若い頃に、さうさう、ゾリッチ★にだつたが、三十萬ほど負けてしまつた。無論自棄になつたさ。お祖母さんは若い連中の無分別には容赦のない方だつたが、どうした風の吹き廻しだか、チャプリツキイを可哀相に思つたのだね。そこで、順々に賭けるやうにと三枚の札を授けたのだ。尤も、もう二度と再び骨牌札は手にしないと約束をさせた上でね。そこでチャプリツキイは相手の家へ行つた。勝負がはじまつた。チャプリツキイは最初の札に五萬を賭けて、見事ソニカ勝ちになつた。倍賭けをぐんぐん張つた。で結局、先の負けを返してもまだお釣りが來た。……」

「ところで、もう寢る時刻だよ。六時十五分前だ。」

本當に、もう明るくなつてゐた。青年たちは杯を乾して別れた。



——どうやらお前樣には、腰元どもがきつうお氣に入り。

——はて、奥方。あれらの方。みづみづして居りまする。

『社交會話篇』

年老いた伯爵夫人***は、化粧の間の鏡に對してゐた。かしづく三人の侍女の、一人は臙脂の壺を、一人は髪針の小函を、もう一人はリボンの色どり燃えるやうな丈高い帽子を捧げてゐる。伯爵夫人は、とうの昔に褪せ凋んだ容色には少しの心も置いてゐなかつたけれど、ただ若い頃の慣はしは悉く棄てずに、相も變らぬ七十年代★の流行にしたがつて、丹念に身裝をととのへることに六十年の昔と同じく時を惜まなかつた。窓際ちかく、この館に養ひとられた若い女が、刺繍の架に向つてゐた。

「お早う御座います、お祖母様」と、一人の青年士官が入つて來て言つた、「ボン・ジュル、マドモアゼル・リーズ。お祖母様、お願ひがあつて參りました。」

「何なの、ポール。」

「ひとり友人をお引合せして、金曜の舞踏會に招んでやつて頂きたいのですが。」

「では舞踏會へお連れおし。そのときにお眼にかかるとしませう。昨夜は***様の所へお出でだつたの。」

「ええ、仰言るまでもなく。――頗る愉快でした。五時までも踊りましたよ。エレーツカヤ夫人の素晴らしさといつたら。」

「いいや、お前、何の好いことがあるものですか。あれのお祖母様のダーリヤ・ペトローヴナ公夫人は、どうしてあれ所ではありませんでしたよ。……けれど、どうだつたの、公爵夫人は餘程お年召して見えましたか。」

「お年を召すですつて？」トムスキイはうつかりと答へた、「亡くなつてもう、七年にもなるではありませんか。」

若い女が顔を上げて、青年士官にめくばせをした。老齢の伯爵夫人には同じ年配の人々の死を匿すことになつてゐたのを思ひ出して、青年は唇を嚙んだ。しかし夫人は、この新しい消息を耳にしながら、少しも動ずる氣色はなかつた。

「亡くなられたつて？」と彼女は言つた、「すこしも知りませんでした。二人して女官に上つて拜謁を賜はつたとき、女皇さまには……」

そこで伯爵夫人は、百ぺん目の昔噺を孫にして聞かせた。

「さあ、ポール」と話し終つて彼女が言つた、「私を起しておくれ。リーザニカ、私の莫盒はどこなの。」

さう言ひながら夫人は、身仕舞を濟ませるため、侍女たちに伴はれて衝立の蔭にかくれた。トムスキイと若い女だけになつた。

「誰方をお引合せになりますの」と、リザヴェータ・イヴァーノヴナが小聲に尋ねた。
「ナルーモフです。貴女は知つてるの？」
「いいえ。そのかた軍人？　それとも文官ですの。」
「軍人です。」
「工兵のかた？」
「いや、騎兵ですよ。だが何故、工兵だなんて思つたのです。」
若い女は笑つて答へなかつた。
「ボール」と伯爵夫人が衝立の蔭から呼んだ、「何か新しい小説を屆けておくれでないか。でも今樣趣味のだけはお斷りですよ。」
「と仰言ると、お祖母樣。」
「つまり、親を踏みつけにする人間や、水死人☆の出て來ないのにして貰ひたいのさ。私は水死人はあまり好かないのでね。」
「お望みのやうなのは今どきありませんよ。いつそ露西亞のでは如何です。」
「おや、露西亞に小説があるの。ぢやお前、それにしませう。きつと屆けてお呉れ、待つてゐますよ。」

「ぢや御免下さい、お祖母さま。急ぎますから。……さよなら、リザヴェータ・イヴァーノヴナ。貴女は何故、ナルーモフを工兵だなんて思つたのだらう。」
トムスキイは化粧の間を出て行つた。
リザヴェータは獨りになつた。彼女は仕事を傍へやつて、窓の外を眺めはじめた。間もなく、往來の向ふ側の角屋敷の蔭から、一人の青年士官が姿をあらはした。すると頰を紅らめた彼女は仕事に戻つて、また顏を布地のうへに伏せた。やがて伯爵夫人がすつかり身仕舞を濟ませてはいつて來た。
「リーザニカ、馬車の用意を」と彼女は言つた、「散歩に出ませうよ。」
リーザニカは刺繍の架から起ち上つて、仕事を片づけはじめた。
「まあ、何といふお野呂さんでせう」夫人は聲を荒らげた、「早く馬車をさうお言ひといふに。」
「ただ今」と若い女は小聲に答へて、次の間へと小走りに消えた。
公爵パーヴェル・アレクサンドロヴィチからの本を捧げて、召使がはいつて來た。
「さう、宜しくとお言ひ」夫人は言つた、「リーザニカ、リーザニカ、本當に何をしてゐるのだらう。」
「ただ今、着更へをいたして。」

「まだ大丈夫ですよ、お前。ここへお出で。一册目を開けて、讀んでお聽かせ。……」

若い女は本を取つて、二三行ほど讀み上げた。

「もつと大きく」と夫人は言つた、「一體どうおしなの。聲が嗄れたとでもお言ひなの。お待ち、足臺をすこし寄せてお呉れ。もつと……そ、よし。」

リザヴェータが二頁ばかり讀んだとき、伯爵夫人は欠伸をした。

「もう澤山」と彼女は言つた、「何といふ莫迦げた本だらう。パーヴェル公爵に返しておやり、寔に有難うございましたつて。……馬車はどうなつたの。」

「ご用意は出來てをります」リザヴェータが、往來に眼をやつて言つた。

「で、お前の着更はどうおしなの?」夫人は言つた、「いつもいつもお前には待たされますよ。とてもやり切れやしない。」

リーザは自分の部屋に駈け込んだ。二分もたたぬうちに、夫人は力一ぱいに鈴を鳴らしはじめた。一方の扉には三人の侍女が、別の扉には從僕が駈けつけた。

「お前達の耳はどうかしてゐると見えるね」夫人が言つた、「私が待つてゐると、リザヴェータ・イヴァーノヴナにさうお言ひ。」

リザヴェータは外出のマントに帽子をかぶつて、その時はいつて來た。

「やつとお出來だね」夫人が言ふ、「まあ大層なおめかしだこと。一體どうした事なの。誰か見せる人でもおありなの。……お天氣はどうか知ら。風が出たらしいね。」

「いいえ少しも、奥様。至極おだやかで御座います」と從僕が答へた。

「お前がたの話は當てにはなりません。風窓を開けて御覽。そうら、やつぱり風だ。それに冷え冷えすること。馬を外しておしまひ。リーザニカ、出掛けるのはやめですよ。折角のお化粧だけれど。」

「何といふみじめな境涯だらう」と、リザヴェータは思つた。

リザヴェータは本當に不幸な娘であつた。「他人の麪包は味ひにがく」とダンテは言ふ、「他人の楷は蹠ゆるにかたし。」★ もし束縛の絆が、高貴の老夫人の許に養ひ取られた哀れな娘の身にこたへぬとしたら、他の誰がその苦がさを知らうか。伯爵夫人★★★は固より邪まな人ではないが、世に甘やかされた女の例しに漏れず、氣儘な人であつた。また、花の時を樂しみつくし、今の世に緣遠になつた老婆の例しに漏れず、吝嗇で、冷たい我執に滿ちてゐた。彼女は今もなほ、社交界の徒な催しには何時も缺かさず姿を見せた。華かな舞踏會にも出入して、厚化粧を凝し時代遲れな衣裳をまとうた彼女は、廣間には無くてならぬ怪奇な置物として、片隅に蹲つてゐた。來着する客人たちは、定めの儀式ででもあるかの樣に一應は彼女に近づいて、鄭重な挨拶を致すの

であつたが、それが濟めばもはや誰も振向かうとはしなかつた。夫人は都ぢうの人々を、嚴格を極めた禮法のもとに邸に引見したが、しかし誰一人の顏も見別ける力は失せてゐた。そして數多の召使たちは、控の間や女中溜りで思ふさま脂ぎり白髮を加へながら、片足を棺に踏入れたこの老媼の物を、われがちに職ね取つた。

リザヴェータ・イヴァーノヴナはこの館の殉教者である。お茶を注いでは、砂糖の使ひ方が荒いと叱られた。小說を讀み上げては、作者の罪咎を一人で着た。散步のお伴をしては、天氣や道がわるいと責められた。定めの給金をきちんと拂つて貰へた例しはないのに、いつも皆の衆と、と言ふのはつまり極めて少數の婦人と同じに、身仕舞をととのへてゐなければ夫人の御機嫌は惡かつた。社交界に出れば、その役割は一層哀れなものであつた。誰でも顏見知りでない者はないのに、人並に扱つて呉れる人は一人もなかつた。舞踏會で彼女が踊れるのは、組合せの足りない時だけである。そのくせ貴婦人たちは、化粧の間へ行つて衣裳の具合でも直すときには、遠慮なく彼女の腕を引いた。彼女にも自尊の心はあつた。彼女は辛い境遇を、痛々しい迄に感じぬいてゐた。そして何時も救ひの手を待設けながら、四圍に氣を配つてゐた。けれど、虛ろな名に醉ひ痴れた青年たちは、彼女に見向きもしなかつた。本當を言へば、彼等が纏はり着く相手の情薄く驕ぶつた令孃たちよりも、リザヴェータは百倍も可愛らしいのに。華やかな、けれど佗しいサロ

ンをそつと拔け出て、自分の貧しい部屋の、壁紙で貼つた衝立や用箪笥や、鏡臺や塗木の臥床のうへに、銅燭臺の暗い光の搖らぐあたりへ、泣きに行くのも幾たびか知れなかつた。

或る日のこと、この物語の始めに書いた晩から二日ののち、今われわれが立停つた場面に先立つ一週間のことであつたが、リザヴェータが小窓の下で刺繍の架に向つてゐるうち、不圖往來を見やると、一人の若い工兵士官がぢつと佇みながら、こちらに眼を注いでゐるのが見えた。彼女は顏を伏せて、そのまま仕事を續けたが、やがて五分ほどしてまた見ると、その士官はやはり同じ場所に佇んでゐた。固より通りすがりの士官と戲れる慣はしもないまま、もう往來を見るのはやめて、今度は二時間ほども面を上げずに針を運んだ。食事の報せがあつたので、彼女は起ち上つて仕事を片附けはじめたが、何とはなしに往來を見やると、まだその士官が立つてゐた。これは彼女にとつて、如何にも不思議なことであつた。貴食が終つてのち、なぜか胸が騷がれて小窓に寄つて見たが、もう士官の姿はなかつた。そのまま彼のことは忘れた。……

二日たつて、伯爵夫人と一緒に馬車に乘らうとすると、また彼が姿をあらはした。玄關際に佇んで、顎の襟を立てて顏をかくしてはゐたが、黑い眼はきらきらと眼庇のかげに光つて見えた。リザヴェータは故しらぬ恐怖にとらはれ、戰きながら馬車に乘つた。

散步から歸ると彼女は小窓に馳せ寄つた。士官はもとの場所に佇んで、ぢつとこちらを見上げ

てゐる。彼女は胸をときめかせ、生れて初めて知る感情に顫へながら窓邊を去つた。

その日からこの方、若い士官の姿が定まつた時刻に、窓の下にあらはれぬ日は無かつた。二人の間には、言はず語らずの間柄が成立つた。彼女は何時もの場所に針仕事をしながら、彼の近づいて來る氣配をおのづから覺るやうになつた。すると彼女は面をあげて、ぢつと彼を見つめる。見つめる時間も、日ましに長くなりまさつた。青年はこの無邪氣なもてなしに感謝の心を抱くかに見えた。二人の眸が合はさるごとに、男の蒼白い頰をさつと紅の射すのを、彼女は若い女に特有の眼ざとさで見て取つた。七日を經て、彼女は彼に微笑みかけた。

トムスキイが伯爵夫人に、その友人を紹介する許しを乞うたとき、哀れな娘の心臓はつよく鳴つた。けれど、ナルーモフは工兵ではなく近衛騎兵だと聞かされ、いらぬ間ひ立てをしたために自分の祕事を、輕薄なトムスキイに知られたことを悔いた。……

ゲルマンは、露西亞に歸化した獨逸人を父として、僅かながらその遺産を承け繼いでゐたが、不羈獨立を標榜してゐる彼は利子などは當てにせず、俸給だけで暮しを立てて、些かの氣紛れにも心を許さなかつた。それでゐて野心家でもあり、且つはうち融けぬ性分なので、その過度な儉約を朋輩の笑草にされる隙を、なかなか見せなかつた。彼は裡に烈しい情熱と燃えるやうな空想を藏してゐながら、堅固な意志の力で、世の常の青年客氣の迷ひには陷らずにゐた。たとへば、

彼が心からの賭博好きでありながら、まだ一度も骨牌札に手を觸れないのは、「餘分な金を手に入れようとして、入用な金を投げ出す」ほどの身代ではないと、口にも出し、また自分にも思ひ込んでゐたからである。その癖、夜どほし骨牌卓の前を離れずに、轉變極まりない勝負のさまを、熱つぽい眸でただわくわくと追つてゐるのであつた。

三枚の骨牌の話は、著しく彼の空想を刺戟して、一晩中頭を去らなかつた。「若し、ひよつとして」と、彼はその翌る日ペテルブルクの街をさまよひながら考へた、「若し、ひよつとしてあの年寄りの伯爵夫人が、この俺に祕傳を明かして呉れたら。さもなければ、ただ三枚の勝札だけでも教へて呉れたら。さうなれば俺も、何で運だめしをせずに置くものか。……何とかして會つて見て、うまく取り入るか。いつそのこと情人にでもなるかな。だが、これは如何にも氣のながい話だ。何しろ相手は八十七の婆さんだからな。七日して死ぬかも知れない。二日して死ぬかも知れない。……所であの話だが、一體あれは本當なのかな。いやいや、儉約、節制、勤勉、これが俺の三枚の勝札だ。これこそ俺の身代を築き上げるどころか七層倍にもして、安樂と獨立を齎すものなのだ。」

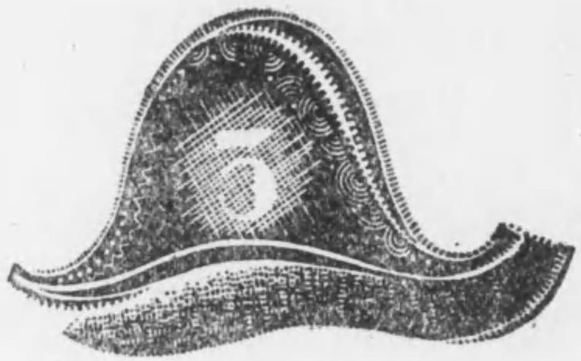
こんな風に思ひ量るうち彼は、ペテルブルクのとある大通りの、ひどく古めかしい構への邸に來かかつた。往來は馬車の列りに堰かれてゐた。車が次々に、燭火まばゆい玄關口へ乘りつける。

すると車の踏段のかげに、嫋やかな美女の脚や、かまびすしい乘馬靴、縞模樣の沓下、外國使臣の細靴などが、絶え間なくさし伸べられる。毛皮の物々しい外套や瀟洒なマントが、威儀を正した門衛の傍を奥へと消える。ゲルマンは歩みを止めた。

「誰方のお邸でせう」と彼は街角の巡警に尋ねた。

「＊＊＊伯爵夫人のです」と巡警が答へた。

ゲルマンは身顫ひした。不思議な話がまたも浮んで來た。彼は邸のまはりをうろつきながら、この邸の主と、その神祕な術のことを考へた。見すぼらしい自分の部屋に彼が歸つたのは、その夜更けてからであつた。長いあひだ寢つかれなかつたが、やつと睡りに落ちると、骨牌札や綠色の卓や、紙幣の束や金貨の堆を夢に見た。一枚一枚と張りながら、ぐんぐん倍賭にして行くと、面白いほど勝ちはなして、金貨を掻き集めたり紙幣を衣囊に押し込むのであつた。日が高くなつてやつと眼を覺した彼は、消え失せた幻の巨富を追つて溜息をついたが、また街に出て當てどもなくさまよつた末に、＊＊＊伯爵夫人の邸に通りかかつた。え知れぬ或る力が彼を導くやうであつた。彼は立ちどまつて、ぢつと窓を見あげた。その窓の一つに、房々とした黑髪が、何かの本か手仕事のうへに俛いてゐるのが窺はれた。ふと顏がこちらを向いて、ゲルマンはそのみづみづしい面立ちと黑い眼とを見た。彼の運命はこの一瞬に決した。



天使のきみよ、御許は
わが讀みをふるひまも
あらせず、四まいの玉
づさ遣はせたまひぬ。

『消息文』

リザヴェータ・イヴァーノヴナが外出のマントと帽子を漸く脱いだとき、伯爵夫人のお迎ひが來た。また馬車の用意が言附けられた。彼女らが馬車に乘らうとし、從僕が二人がかりで老夫人を抱へ上げて車の扉口へ押し入れたとき、リザヴェータは、例の工兵士官が車の輪にぴつたりと身を着けてゐるのを認めた。やがて自分の手が握りしめられるのを感じたが、怖ろしさに何事も覺えぬうちに青年の姿は消えて、掌には一通の手紙が殘つた。彼女はすばやくそれを手袋に祕めた。途々何も耳にはいらず、何も眼にはうつらなかつた。馬車のなかで夫人は、「いま會つたのは誰方」とか、「この橋は何といふ橋」とか、「あの招牌には何と書いてあるの」の類の質問を、しきり無しにするのが常であつたが、その日リザヴェータは時外れに上の空な返事ばかりしたので、仕舞には夫人を怒らせてしまつた。

「まあまあ、この子はどうおしなのだらう。氣が遠くでもおなりなの、聞えないの、それとも分らないの。……有難いことに、私はまだまだ舌も縺れないし、氣も確かですよ。」

リザヴェータは聽いてはゐなかつた。歸り着くのも待遠く自分の部屋に駈け込み、手袋から例の手紙を拔き出した。手紙は封印がしてなかつた。リザヴェータは讀んだ。――それは戀の思ひを綴つたものであつた。あくまでも優しく、あくまでも禮を失はず、一字一句みな獨逸の小說から拔いたものながら、獨逸語を知らぬ彼女にとつては、隨分と感動の深いものであつた。

とはいへ彼女は、受取つた手紙の仕末に困じ果てた。生れ落ちてはじめて、若い男と人目を忍ぶことをしたのである。男の大膽さを思ふと身顫ひが出た。自分の輕はづみを叱つては見たものの、さてどうしよう當てもなかつた。もう小窓の所に坐るのはやめて、そ知らぬ顏して、若い士官の執心の冷めるのを待たうか。手紙を送り返さうか。それとも、きつぱりとした返事を書いてやらうか。……彼女には相談すべき友達も、賴りとする師もなかつた。リザヴェータは返事を書くことに決めた。

彼女は書き卓に向つて、ペンと紙を手に取りあげて、さて考へに沈んだ。幾度か書きはじめては破り棄てた。文句が鄭重にすぎたり、無慈悲にすぎたりした。終に彼女は、滿足のゆく數行を得た。――

『み心の』と彼女は書いた、『清らにいますおん方が、よもこの身恥ぢしめようとてあの樣なことを遊ばしたとは存じ寄りませぬながら、さりとて御交らひこの樣にして取結ぶも叶ひませぬので、御文はひとまづ御返し申します。この上また、無躾のおん返りしたためます折もなきやう、祈りまゐらせつつ。』

翌る日、來かかるゲルマンの姿が目にはいると、リザヴェータは刺繍の架を起つて廣間へ出て、そこの風窓から往來めがけて手紙を投げた。案に違はず、若い士官は眼ざとくそれを見てとり、

小走りに拾ひ上げて菓子店★にはいつた。封印を破つて見ると、中には自分の手紙と、リザヴェータの返事が見出された。別段思ひ設けぬことでもなかつたから、彼はなほ今後の手立をさまざまに思廻らしながら、その日は家に歸つた。

三日ののち、婦人帽子の店からといふ眼のくりくりした少女が、一通の書附をリザヴェータに齎した。リザヴェータは何か拂ひ潔した勘定でもあらうかと、心を騷がせながら開封して見たが、忽ちゲルマンの筆蹟を見て取つた。

「何かの間違ひではなくて？」と彼女は言つた、「この書附、私のではありませんもの。」

「いえ、大丈夫でございます」とその少女は、惡賢い笑みを包みかくしもせずに言ひ切つた、「どうぞ御覽あそばして。」

リザヴェータは書附に眼を走らせた。それは逢引をもとめた文面であつた。

「そんな筈はありません」とリザヴェータは、男の氣早さに魂消もし、この文使の心許なさに呆れもして言つた、「どうしても人違ひですわ。」

そして手紙をきれぎれに引裂いた。

「もしもお人違ひなら、何故お破り遊ばしますの」と少女は言つた、「私、あの方にお返し致さなくてはなりませんのに。」

「どうぞお願ひですから」とリザヴェータは、拔目ないその言葉に面を赤らめて言つた、「もう二度と、こんなもの持つて來ないで頂戴。そして貴女が頼まれた方には、少しはお愼しみ遊ばせと申しあげて。……」

しかしゲルマンは思ひ止まらなかつた。一日も缺かさぬ手紙が、手を變へ品を變へてリザヴェータに屆けられた。それはもう獨逸小說の引寫しではなかつた。ゲルマンは激しい情に浮かされて、迸る思ひをそのまま筆にした。文面には、抑へがたい心の亂れと撓まぬ欲望とが跡をとどめた。リザヴェータの方でも、送り返さうと考へるどころか次第に醉はされて、やがては返事を出しはじめた。その返事も時とともに、長く優しくなりまさつた。で、或る日、彼女は次のやうな手紙を窓から投げた。

『今夜 *** 大使の館に舞踏會がございます。伯爵夫人も參られます。私どもは二時までそちらに居りませう。今夜こそは、人目にかからずお目文字いたすによき折でございます。奥樣がお出ましになれば、召使どもは直ぐに引取つてしまひませう。門衛は入口に居殘りませうが、それとて普段は部屋に退つてをります。十一時半にお越し遊ばして、眞直ぐに表の段をお上りなさいませ。もしも誰かが控の間にをりましたなら、伯爵夫人はお内かとお尋ね下さいませ。すれば御不在の由申しませうから、そのままにお引取り下さいますやう。十のうち九までは咎める者もない

ことと存じます。女共はみな一つ部屋に寄つて居りますから。さて控の間から左へ眞すぐお出で遊ばせば、奥様の御寢所でございます。御寢所の獨立のかげに小さな扉が二枚ありまして、右手のは奥様が絶えておはいり遊ばした例しのない内房に、左手のは廊の間に出ます。廊の間の狹い廻梯子をお上りになれば私の部屋でございます。』

定めの時刻を待つあひだ、ゲルマンの總身は虎のやうに顫へた。寄の十時にはもう、夫人の館の前に佇んでゐた。その夜は凄まじく荒れた。風は咆え、雪は羽毛を引ちぎるやうに降りしきつた。街燈は烟りわたり、道を行く人影もなかつた。時折、家路に遲れた客はないかと鵞の目鷹の目、怪しげな馭者が痩馬に鞭打つて過ぎた。ゲルマンはフロック一重で佇みながら、風も雪も覺えなかつた。やがて伯爵夫人の馬車が曳出された。貂の外套に佝僂のやうな猫脊を包んだ老媼を、從僕たちが馬車へ擔き上げる後から、髮には生花を挿し、薄手のマントをまとつた蓑ひ子の姿が垣間見られた。馬車の扉が音を立てて閉ぢ、車は雪の夜道を行なづみながら去つた。門衛が大扉を閉めて、窓が薄暗くなり館に人聲が絶えた頃、ゲルマンは再び行きつ戻りつし始めた。街燈に寄つて時計をすかして見ると、十一時を二十分過ぎてゐた。彼はもう街燈の下を去らずに、時計の針の殘る歩みを見守つた。

十一時半丁度に、ゲルマンは表の石段を昇り光まばゆい玄關にはいつた。門衛の姿はなかつた。

一息に階段を馳せ上つて控の間の扉を開けると、ラムプの灯影に僕が一人、壞れかけの古めかしい椅子を繼合せて睡りこけてゐた。ゲルマンは確かな足取りを爪立てながら、僕の傍を通り拔けた。つづく廣間にも客間にも灯影は無く、控の間の光が幽かに這ふばかりであつた。ゲルマンは、寢間にはいつた。

古びた聖者の畫像に滿ちた櫃の前には黄金の御燈が燃えてゐた。絹の色も褪せた大椅子、金泥の剝げ落ちた長椅子が、羽の坐褥もろとも唐模様の壁の下に鬱々と相對してゐた。巴里のルブラン夫人★の筆に成る肖像畫が二枚、壁に掲げてあつた。一枚は年の頃四十ばかりの赭顔の肥大漢をあらはし、その淡緑の軍服の胸には勳章が輝いてゐる。もう一枚は年若な鈎鼻の美女で、打粉した髮を額際凄く搔上げ、薔薇の花を挿してゐる。部屋の四隅には牧童の燒物や、名高いルロア★が腕を振つた置時計、飾り小函、ルーレットの道具、羽扇などのほか、前世紀の末年モンゴルフィエの氣球★やメスメルの磁氣★と一緒に發明された樣々の貴婦人の遊び道具が、所せまいまで並べ立ててあつた。ゲルマンは衝立のかげへ進んだ。そこには小さな鐵の寢臺があり、手紙の通り右手に内房の扉が、左手には廊下へ出る扉があつた。左手のを開けると、哀れな娘の部屋へ導く狹い廻梯子が見えた。けれど彼は歩を返して、眞暗な内房に踏入つた。……

時は徐ろに過ぎた。闃として物音もない。客間の時計が夜半を報ずると、遠近の間の時計も次

次に十二を打つたが、暫てもとの靜寂に歸つた。ゲルマンは火の無い煖爐に凭れてゐた。彼は全く平靜であつた。避け得られぬ危難を覺悟した人のやうに、その心臟は正しい響を傳へた。時計が一時を打ち、續いて二時を報ずると、やがて遙か遠く馬車の音を聞いた。吾にもなくゲルマンの胸は騷いだ。馬車の音は間近に來て止り、踏臺を下す響がした。忽ち館の内がざわめき立つて、召使たちは馳せ交ひ高聲に呼びかはし、部屋部屋に灯がとぼされた。三人の老女中が寢間に駈け入ると、やがて伯爵夫人は生きた心地もなげな樣子で姿をあらはし、ヴォルテール椅子に沈むやうに掛けた。隙見してゐるゲルマンの直ぐ鼻先を、リザヴェータ・イヴァーノヴナが通り過ぎた。續いてゲルマンは、狹い階段を氣忙はに上つて行く足音を耳にした。心臟が良心の疼きを訴へると見たのも束の間で歇み、彼は石と化した。

伯爵夫人は鏡の前で衣裳を脱ぎはじめた。薔薇を散らした髮飾をはづし、打粉の假髮を取去ると、短く刈込んだ白髮頭があらはれた。髮針は四圍に雨とみだれ散つた。銀絲を縫取つた黃色い衣裳が、浮腫んだ足もとに落ちて、ゲルマンは心ならずも女の化粧の、興ざめな祕密を目のあたりに見た。やがて伯爵夫人は夜帽をかぶり寢衣姿になつた。楚々としたその服裝の方が彼女の老齡によく似合つて、最早それほど怖しくも醜くもなかつた。

老人の例しに漏れず、伯爵夫人は不眠に惱むと見えた。着更を濟ませた彼女は、窓の下の大椅

子に掛け、老女中らを退らせた。燭臺も序でに下げたので、室内は再びただ一つの御燈に照されることになつた。夫人は眞黃な顏をして、弛み果てた唇をしきりに動かし、首を絶えず左右に搖すつた。どんよりとしたその兩眼は、心の虛ろを語つてゐる。この老媼の身の搖れ具合を眺めてゐると、それは意志の作用ではなくて、何かしら電流性の皮膚反射と思へるかも知れぬ。

突然、その死人のやうな顏には、名狀しがたい變化があらはれた。唇は動きを止め、眼は生を取戻した。伯爵夫人の面前に、見知らぬ男が立つた。

「お靜かに。どうぞ、お落着きになつて」とその男は低いながら明晳な口調で言つた、「私は決して怪しい者ではありません。お願ひがあつて參つた者です。」

老媼は無言で彼を見詰めた。何事も聞えぬ樣子であつた。ゲルマンは耳が遠いのかと思ひ、すぐ耳許でもう一度同じことを繰返した。老媼はやはり默つてゐた。

「貴女なら」とゲルマンは續けた、「生涯の幸福を授けて下される筈です。しかも貴女にとつて、何の御損もないのです。私は、貴女が三枚の骨牌を立續けにお當てになると伺つて參りました。」

ゲルマンは言葉を切つた。伯爵夫人はやつと彼の望みが呑込めた風であつた。そして、返事の言葉を搜すらしかつた。

「あれは笑談でした」と、やがて彼女は言つた、「本當に、あれは笑談なのです。」

「いいえ、違ひます」とゲルマンはむつとして言返した、「チャプリッキイに教へて、あんなに勝たせてお遣りになつたのを、もうお忘れですか。」

老夫人は不安げな様子をした。激しい心の動揺が面にあらはれた。が間もなく、もとの無表情に歸つた。

「私に」とゲルマンは續けた、「その三枚の札を教へて下さいますまいか。」

夫人は答へなかつた。ゲルマンは言葉を繼いだ。

「誰に教へようと、札の祕傳をいつまでもお守りになるのでせう。お孫さんにですか。お孫さんは皆、それがなくとも金持です。お金の値打も知らぬ人達です。道樂者に三枚の札などは無益な業です。親の遺産を失くすやうな男は、たとひどんな惡魔のお助けがあらうと、野たれ死にするのが落ちでせう。私は道樂者ではありません。お金の有難さを知つて居ります。三枚の骨牌は決して無駄には致しません。ですから……」

彼は言葉を切つて、總身を顫はせながら返事を待つた。夫人は答へない。ゲルマンは跪いた。

「もしもその昔」と彼は言つた、「貴女のお胸に戀が宿つたことがあるなら、その悦びをまだお忘れでないのなら、一度でも赤さんの生ぶ聲に微笑をされたことがあるなら、お胸に何か知ら人間らしいものの聲を聞かれたことがあるならば……若しさうならば貴女の奥方とし、戀人とし、

お母様としての愛にかけて、この世の有りとある聖なるものにかけて、どうぞ私のこのねがひをお聽き屆け下さい。祕傳を明かして下さい。それが貴女に何でせう。……たとひその爲、怖しい罪咎をお着にならうと、永遠の至福とお別れにならうと、惡魔とどんな取引をなさらうと、まあ考へても御覽なさい――貴女はもう御老體です、この世の命もお長くはありますまい。貴女の罪咎は私の魂にお引受けします。ですから祕傳をお明かし下さい。男一匹のどんな大きな幸運が、貴女のお手に握られてゐるか、考へて見ても下さい。いやこの私だけではなく、子々孫々までも貴女の記念をどんなに敬ひ尊び、聖體のやうに崇めるか……」

老媼は一言も答へなかつた。

ゲルマンはすつくと起つた。――

「老いぼれの鬼婆め」と彼は齒切りして叫んだ、「それなら厭でも吐かせてやる……」

さう言ふか言はぬに、衣嚢の拳銃を引出した。

拳銃が目にはいると、伯爵夫人は再び烈しい恐怖をあらはした。己れの身を庇はうとでもするやうに、首を振り兩手を上げた。が、やがて後に反り返ると、そのまま動かなかつた。……

「子供じみた眞似はやめませう」とゲルマンは老媼の手を取つた、「もう一度だけお尋ねします。札の祕傳をお明かし下さるか、それともお厭か。」

伯爵夫人の答はなかつた。彼女は死んでゐた。

一八＊＊年五月七日

歸依も無う行儀あやしの御仁かな

『消息文』

まだ舞踏會の衣裳のまま部屋に坐つて、リザヴェータ・イヴァーノヴナは深い物思ひに沈んでゐた。館に歸るとすぐ、ほんのお役目に身の廻りの世話をたづねた寢呆け顏の小女を、着更へは一人でするからと退がらせ、ゲルマンが忍んで來てゐて呉れればいいがと思ひ、またどうか居ないで呉れればと願ひながら、顫へる手に部屋の扉を開けた。男の來てゐないことを一目で知つた彼女は、逢引の邪魔をした旋毛曲りの天運に感謝を捧げた。彼女は着更へもせずに坐つて、ほんの僅かの間にこれ程の深入りしたのは、一體どうした事か知らと樣々に思ひ返した。小窓の所であの若い士官の姿を始めて見た日から、數へればまだ二十日にもならぬのに、繁々と文も通はせ、既に男に夜更けの逢引をまで許したとは。もしも手紙の末に書いてなかつたなら、その名も知らずにこの部屋に迎へることとなつたに違ひない。言葉を交したことも、聲を聞いたことも、いや今宵といふ今宵まではその人柄を、噂話に聞いたことすら無かつた。何とした事だらう。……

その晩トムスキイは、常とは違つて＊＊＊公爵の令孃ポーリン姫が、他の男と戯れるのを見て面を膨らし、それなら此方にも考へがあるとばかりリザヴェータを招き寄せて、いつ果てるとも見えぬマズルカの一曲を彼女相手に踊り拔いた。そのあひだ彼は、リザヴェータが工兵士官にばかり現を拔かしてゐると揶揄ひ、よもやと思ふあたりまでも夙に承知してゐるぞと仄めかした。笑

談口の合ひ間にはちくりと急所を刺す言葉もあるので、リザヴェータが本當に自分の秘事か知れたのかしらと、思つたことも一度や二度ではなかつた。

「そんなこと、誰方にお聞きになりまして？」と、微笑みながら彼女は尋ねた。

「御存知の人の友達にさ」とトムスキイは答へた、「その名も高いさる男にさ。」

「名高いお方つて、誰方ですの。」

「その名はゲルマン。」

リザヴェータは何も答へなかつたが、手足は凍つてしまつた。……

「このゲルマンと言ふのがね」とトムスキイは續けた、「いともロマンティクな男でね、横から見ればナポレオン、心を割ればメフィストフェレスといふ鹽梅なのさ。僕の見る所だけでも、奴の良心には苛責の種が少くも三つはあるね。おや、どうかしたの。蒼い顏をして……」

「頭が痛みますの。……で、その、ゲルマン樣とか申す方が何と仰言いましたの。」

「ゲルマンはね、その友達のことを齒痒がつてゐるのさ。俺ならあんな風にはやらないと、力み返つてゐるのさ。……どうやらゲルマン大人御自身も、君に思召があるらしい。少くも、その友達のお惚氣を聞くたびに、顏色甚だ穩かならずさ。」

「でもその方、どちらで私を御覽遊ばしたのでせう。」

「お寺かな。それとも野遊びの道すがらかな。まあそんなことは神のみぞ知しめすさ。ひよつとしたら君の部屋で、君が夢を見てゐる間かも知れないのさ。何しろあの男は……」

そのとき、三人の貴婦人が近づいて來て、『お忘れ？　お心殘り？』★の問を掛けたので、折角リザヴェータにとつて惱ましくまた興の乘りかけた話は、中途で斷れてしまつた。

運まかせの選擇でトムスキイに當つたのは、他ならぬ＊＊＊公爵令嬢であつた。令嬢は定めの度數のうへに踊を繰返して、席に近づくと見せてはまた身を飜しなどするうち、巧みな口說で相手の拗ね心の綻れを戻してしまひ、席に歸つたトムスキイの恩ひには最早ゲルマンもなく、リザヴェータもなかつた。リザヴェータとしては先刻の話の續きが聞きたくてならなかつたが、やがてマズルカの曲も終り、伯爵夫人の御歸館となつた。

思はせ振りなトムスキイの言葉は、その實マズルカには附物の戯れ口に他ならなかつた。けれども夢見がちな女の胸には、その一言一句も深くしみ渡つた。トムスキイのなぐり書きした肖像は萬更自分に思ひ描かなかつた圖柄でもない上に、近頃の小說趣味も手傳つて、今ではもう眼らしくもあり慕しくもある、俗で下賤な男の面輪であつた。……かうして露はな手を十字に組み合せて、凋れた花もそのままの頭を、肌けた胸に落してゐるとき、遽かに扉があいてゲルマンがはいつて來た。彼女は身を顫はせた。

「どちらにお出で遊ばして」と怯えた小聲で彼女は尋ねた。

「伯爵夫人のお寢間に」とゲルマンは答へた、「たつた今出て來たばかりです。あの人は亡くなりました。」

「え、何と、何と仰言いますの。」

「それもどうやら」とゲルマンは言葉を繼いだ、「この僕のせゐらしい。」

リザヴェータは彼を見上げた。すると、トムスキイの言葉が胸の底に響き返つた――この人の魂には苛責の種が少くて三つはあるのだ。ゲルマンは彼女に近い窓框に腰を下して、一切を物語つた。

リザヴェータは怖れに戰きながら聽き入つた。では、情に滿ちたあの手紙は、燃えるやうなあの願事は、傍若無人のあの執心は、みんな戀ではなかつた。この男の心を燃え立たせたのは、あの賤しいお金なのだ。彼の渴きを醫し、幸福にしてやれたのは、この自分ではなかつた。私といふ可哀相な娘は、押込强盜どころか自分の恩人を手に掛ける男とも知らずに、その手引をしてやつたのだ。……彼女は、今は及ばぬ後悔に咽び泣いた。ゲルマンは無言で女を見詰めてゐた。その胸もやはり引き千裂られる思ひであつた。とはいへ彼の冷たい心を騷がせるのは、哀れな娘の涙ではない。嘆き悶える有樣の一入美しい姿でもない。現に目の前で息絶えた老媼の姿を思つて

さへ、彼の良心は疼きはせぬ。巨富を夢みたあの祕傳が、今となつては手に入れる術もない、それを思ふと胸が張り裂けた。

「あなたは怖ろしい魔物」と、やがてリザヴェータが言つた。

「殺すつもりは無かつたのに」とゲルマンは答へた、「彈丸も塡めてはないのだし。」

二人は無言に歸つた。

やがて東雲が訪れた。リザヴェータが燃え崩れた蠟燭を吹消すと、白々とした光が部屋に流れた。彼女は泣き濡れた眼から手巾を離して、ゲルマンを見上げた。彼はまだ窓框に掛けたまま、腕を組み眉を嶮しくひそめてゐた。さうしてゐる彼はナポレオンに生き寫しであつた。その似通ひが、リザヴェータには怖ろしくも、またつと胸を衝かれる思ひでもあつた。

「どうしてお出し申したらいいでせう」やがてリザヴェータが口を切つた、「隱し梯子にお連れする心算でしたのに、今ではお寢間を通るのが怖くて。……」

「その梯子の在處を敎へて下さい。一人で出て行きます。」

リザヴェータは立上つて簞笥から鍵を取出し、手渡ししながら道順を詳しく敎へた。ゲルマンは女の脆へのない冷え果てた片手を握りしめ、俛首れた額際に接吻して出て行つた。

彼は廻梯子を下りて、再び伯爵夫人の寢間に踏み入つた。死んだ老媼は石像さながら椅子に掛

けて、その面に底知れぬ安らぎを湛へてゐる。ゲルマンは夫人の前に立ちどまり、實相の怖しさを見極めようと願ふかのやうに、ぢつと眸を離さなかつた。やがて彼は内房にはいり、壁紙のうへを手探りで隱し扉を搜し出して、一寸先も見えぬ梯子段を下りはじめた。闇の中で不圖、奇妙な思ひが涌いて來た——『この梯子を傳はつて』と彼は考へた、『六十年の昔には、それも丁度この刻限に、粹な上衣を裾長に王鳥髻★した果報者が、三角帽を抱きしめ抱きしめ、やつぱりあの寢間へ通つたものだらう。其奴が塚穴の底でとうの昔に腐れ切つたころ、その日の色女の君は、やつと今しがたお目出たくおなりだ。……』

階段が盡きて、また扉があつた。それも同じ鍵で苦もなく開けて、ゲルマンは往來へ拔ける廊下に出た。

その夜故男爵夫人フォン・Vたに
がし白裝束して余の面前に立つて
曰く　久濶なりや識定官どの。

――スエーデンボルグ

この宿命の夜から三日目の朝の九時に、ゲルマンは＊＊＊寺院で行はれる故伯爵夫人の葬式に出掛けた。悔む心は無いものの、それでも矢張り『老婆殺し』と繰返す心の聲を、抑へる術もなかつた。信心も無い癖に迷信の深い彼は、老媼の怨靈の祟りもあらうかと、その怨しを念ずるため葬式に列ることに極めたのである。

寺は一ぱいの人であつた。ゲルマンは群衆を掻き分けて進んだ。天鵞絨の天蓋の下に、柩を安置した葬龕が据ゑてあつた。柩のなかには死人が、笹縁頭巾に白繻子の衣のいでたちで、胸に合掌して横はつてゐる。家の者が柩を取圍んでゐた。下男は黒の長衣を着て、肩には紋章結びのリボンを附け、手に手に蠟燭を持つてゐた。子、孫、曾孫などの一族の者は、大喪の服に身を包んでゐる。

誰も泣いてはゐなかつた。泣く者があるなら、それは空涙に極つてゐる。伯爵夫人はあれ程の高齢であつて見れば、亡くなつても今更心を傷める者もなく、一族の者などはとうの昔から、この世の人の扱ひはしてゐなかつた。若い僧が棺前の説教をはじめた。感動の深い分明な口調で、永年のあひだ信者としての大往生を念じつつ、感心な修業を靜かに積んだ故人の、安らかな昇天を説いた。「死の御使はやがて」と講師が言つた、「いと清らかに行ひ澄して天なる婚姻を待ち焦

れたる、一つの魂を見出されました。」法會は靜やかに終りに近づいた。親族縁者がまづ屍に別を告げた。つづいて、その昔仇な愉樂を共にした女に最後の別を告げようと、一般會葬の群が長い列をなして進んだ。召使の列がそれに續いた。一ばん遲れて、故人の永年の話相手であつた年の頃も同じ老女が、二人の婢に兩脇を支へられながら進んだ。もはや跪く力も失せてはゐたが、落涙しながら主の冷え果てた手に接吻したのは、彼女だけであつた。

老女が棺前を退くと、ゲルマンはいよいよ決心を固めて出て行つた。彼は樅の若枝を敷いた冷たい床にひれ伏したまま、暫らくは動かなかつた。やがて起ち上ると、夫人の死顔にも劣らぬ蒼白な顔をして、葬龕の階段を上つた。彼が屍の上に身をかがめた時、不圖死人が片眼をしばたいて嘲りの一瞥を與れたと見えた。ゲルマンは急いで後退るはづみに、足を踏み外して仰向けに床に倒れ落ちた。人々は駈け寄つて彼を起した。丁度そのとき、リザヴェータ・イヴァーノヴナも氣を失つて、寺の入口へと擔き出された。……この插話のため壯嚴な空氣は暫く破れて、會葬者の間に低い呟きが起つた。故人の近親といふ瘦身の侍從職が、傍の英國人を顧みて、あの青年士官は夫人の隱し子なのだと耳打ちした。英國人は冷然とした「ほう」で應じた。

その日の暮れるまで、ゲルマンは快々として樂しまなかつた。寂れた小料理屋へ行つて夕食を認めながら、珍しく酒をあふつた。それで内心の疼きが鎭まらうかと思つたが、酒の勢で妄想は

彌が上にも募つた。家に歸ると着更へもせずに寢床に倒れ、そのまま深い睡りに落ちた。

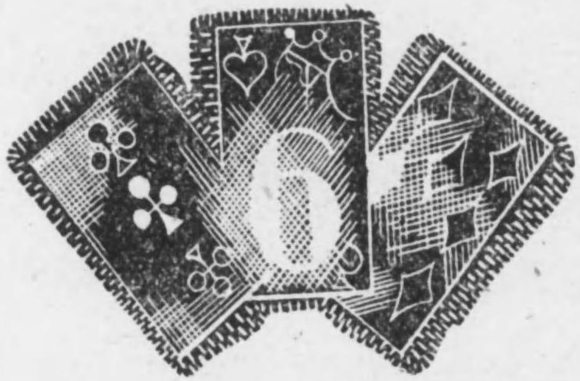
夜中に眼を覺すと、月光はひたひたと部屋を浸してゐた。時刻を見ると三時に十五分前。眼が冴えてしまつたので彼は床の上に起き返り、伯爵夫人の葬式に思ひを馳せた。

そのとき往來から、誰かしら窓を覗き込んだが、直ぐに行過ぎた。ゲルマンは氣にも留めなかつた。一分ほどすると、今度は表の間で扉の開く音がした。從卒が例の通りに醉ひ痴れて、夜遊びから歸つて來たのだらうとゲルマンは思つた。が續いて、聞き馴れぬ足音がした。誰か知らが上沓の音をしのばせながら歩いてゐる。扉が開いて、白衣の婦人がはいつて來た。ゲルマンは年老いた乳母の姿と思つて、この時刻に何しに來たのかと訝るうち、白衣の影は風のやうに近づいた。見れば、枕邊に立つたのは紛ふ方ない伯爵夫人であつた。

「今夜來たのは私の本意ではありません」と夫人は力の籠つた聲で言つた、「お前の望みを叶へてやれとの仰せです。『三』、『七』、『一』――この順で張れば勝ちです。唯ひと夜に一枚だけしか張つてはなりません。また勝つた上は死ぬまで、二度と再び骨牌を手にしてはなりません。また、あのリザヴェータを嫁に貰ふなら、私を殺めた咎は消してあげます……」

言ひ終ると夫人は靜かに身を反して、扉から姿を消した。上沓の響が暫く殘つた。やがて入口の扉の音が聞え、誰かしらまた窓を覗き込んだ。……

彼は長いあひだ茫然としてゐた。やがて次の間へ行つて、床に倒れ臥した從卒を搖り起して見たけれど、相變らず醉ひ潰れた彼の口からは何の消息も聞き出せなかつた。玄關の扉を見ると、錠は下してあつた。ゲルマンは部屋に戻つて蠟燭をともし、幻に見たことを書きとめた。



——すとっぷ。

——やあ、身共に向つてすとっぷとは慮外な奴。

——滅相もないこと。御すとっぷと申しました。

精神界に二つの固着觀念の共に存し得ぬのは、恰も物質界に二つの物體が同時に同じ場所を占め得ぬと同斷でもあらうか。聽てゲルマンの心には『三』『七』『一』が擴がつて、亡き伯爵夫人の面影を蔽ひ盡した。『三』『七』『一』は瞬時も彼の腦裡を去らず、絶えずその唇を漏れた。若い娘を見掛ければ、「いい樣子だな、まるでハートの『三』だ」と言ふ。時を問はれれば、「今『七』に五分前」と答へる。布袋腹した男に逢へば、きつと『一』を思ひ出す。『三』『七』『一』は夢にまで迫ひ掛けて來て、さまざまな形を現はした。『三』は見事な大輪の花となつて開き、『七』はゴチック式の門となつて閉ぢた。その上『一』は女郎蜘蛛に化けた。彼の思ひは一つに凝つた。かくも高價に購つた祕傳を、心ゆくまで使つて見たい。休暇を取つて旅に出ようか。堂々と巴里の賭場へ乗込んで、まんまと蕩し込んだ運の女神を、うんと搾つて呉れようか。……不圖した機會が、彼をこの心勞から救つた。

モスクヴァに、貴紳をすぐつた賭博倶樂部があつた。倶樂部を統べるのは名高いチェカリンスキイで、これは骨牌を終生の友として、勝てば利の高い手形で取り、負ければばつぱと現生で拂ふうち、何時か巨萬の富を積んだといふ男である。彼の持つ經驗の深さは會員の信望をつなぐに足りたし、愛想よい陽氣な性格は跨ぎ易い閾、腕利きの料理番と相俟つて、世の尊敬をすらから

得た。その彼がペテルブルクに來たのである。で、舞踏會は骨牌の札に、口說の妙趣はファラオンの滋味にと、それぞれ見變へた若い連中が、たちまちその家に群り寄つた。ナルーモフもゲルマンを連れて來た。

二人は禮儀正しい給仕人に迎へられて、立派な部屋を幾つか通拔けたが、どの部屋も人で一ぱいであつた。將軍や顧問官が寄つてホイストを鬪はせる一方では、若い連中が絹張の長ソファに寢そべつて、氷菓を嘗めパイプを吹かしなどしてゐる。サロンには細長い卓の周りに二十人程の不孝者がぎつしりと居並び、主が元締をつとめてゐた。彼は年の頃六十ばかり、いかにも溫雅な風采で、銀髮をいただく血色のよい丸顏は、心の善さを物語つてゐる。潑溂たる微笑を絶やさぬその眼許も見棄てがたい。ナルーモフはゲルマンを引合せた。チェカリンスキイは打融けた物腰で手を握り、お宅同樣にお寬ぎ下さいと言ひ置いて、また元締をつづけた。

札の分配は頗る手間取つた。卓上の札數は三十を越すうへに、チェカリンスキイは一枚投げては手を休めた。かうして居並ぶ連中に、考へをまとめ又は負け高の覺え書する裕りを與へる一方には、人々の要求に一々慇懃に耳を傾け、更に一層慇懃を極めた態度で、放心の手に折曲げられた『稜餘り』★を伸しなどした。

やつと一順廻つた。チェカリンスキイは骨牌を切つて、新たに配る用意にかかつた。

「僕にもひとつ配つて下さい」と、やはり勝負に加はつてゐる肥大な紳士の後から、ゲルマンが手をさし伸べて言つた。

チェカリンスキイは微笑して、承知のしるしに默つて頭を下げた。ナルーモフも笑ひながら、ゲルマンが永年の斷食を解いたことを祝し、幸ある首途を祈つた。

「よし來た」と、持札の脊に白墨で金額を書込むと、ゲルマンが言つた。

「幾程でございませうか」と元締は眼を細めて覗き込みながら尋ねた、「失禮でございますが、ちまつと見え兼ねますので。」

「四萬七千」とゲルマンは答へた。

それを聞くと皆が一齊に振向いて彼を見た。

「奴、調子が狂つたぞ」とナルーモフは思つた。

「念の爲申し上げさせて頂きますが」とチェカリンスキイは變らぬ微笑を湛へながら言つた、「それは少々大き過ぎは致しますまいか。こちら共ではまだ誰方樣も、單賭け二百七十五以上をお張りになつた方は無い樣に存じますが。」

「いや結構です」とゲルマンは言返した、「で、僕の札をお受けになるか、それとも……」

チェカリンスキイは承諾のしるしに穩かに頭を下げた。

「ただ申し上げたいと存じますのは」と彼が言つた、「皆樣の御信用を忝らして居ります私と致しましては、現金で御座いませんと少々元締を勤め兼ねるのでございます。固より私一個と致してはお言葉だけでもう充分で御座いますが、何分賭事の定めもあり、旁々計算の都合もある事で御座いますから、恐れ入りますが札に現金をお載せ置き願へますまいか。」

ゲルマンは衣囊から一枚の手形を取出して、チェカリンスキイに渡した。彼はざつと眼を通したのち、それをゲルマンの札に載せた。

札は配られた。右手には『九』が、左手には『三』が出た。

「やつた！」とゲルマンは持札を示しながら言つた。

其處此處に呟きの聲が高まつた。チェカリンスキイはちらと眉を曇らせたと見えたが、すぐに元の穩かな微笑に歸つた。

「お支拂をお受け下さいませうか。」

「では、さう願ひませう。」

チェカリンスキイは衣囊から數枚の手形を引出し、きれいに拂ひを濟ませた。ゲルマンは金を受取ると卓を離れた。ナルーモフがまだ茫然としてゐるひまに、彼は檸檬水を一杯飲んで家途についた。

翌る晩、彼はまたチェカリンスキイの家に姿をあらはした。やはり主が元締をしてゐた。ゲルマンが卓に近づくと、人々はすぐに席を明けて呉れた。チェカリンスキイも愛想のよい會釋を見せた。

ゲルマンは一勝負濟むのを待つて札を張り、その脊のうへに、昨夜の勝ちに併せて、更に四萬七千を載せた。

札が配られた。右手には『小姓』が、左手には『七』が出た。

ゲルマンが持札を起すと、それは『七』であつた。

感嘆の聲が廣間に滿ちた。チェカリンスキイは明かに動搖の色を見せた。彼は九萬四千を數へてゲルマンに渡した。ゲルマンは冷やかな素振りで受取り、すぐに卓を離れた。

次の晩、ゲルマンの姿はまたも卓の前にあらはれた。一同は彼を待ち設けてゐた。將軍や顧問官までが、この珍らしい勝負を見物しようと、ホイストの卓を見棄てた。青年たちも長ソファから跳ね起き、給仕も殘らず寄つて來てゲルマンの周りに環を作つた。今迄勝負をしてゐた連中も張るのはやめて、どうなる事かと片唾をのんだ。相も變らぬ微笑を湛へてはゐるものの、その顏色の蒼白を蔽ふべくもないチェカリンスキイと卓を挾んで對しながら、ゲルマンは一騎打の覺悟を決めた。

二人の手は一齊に動いて、二組の骨牌の封が宙に飛んだ。チェカリンスキイの先づ切つた札を、ゲルマンが切り直した。更に彼は自分の札を張り、そのうへに手形を山と積んだ。それは恰も決鬪を見るやうであつた。不氣味な沈默が四圍を領した。

チェカリンスキイは顫へる手に札を配つた。右手には『女王』が、左手には『一』が出た。

「『一』がやつた！」とゲルマンは言つて、持札を起した。

「いや、『女王』の負けと存じますが」とチェカリンスキイが優しく言ひ直した。

ゲルマンは愕然と自分の手を見た。張つた筈の『一』は消えて、開いたのはスペードの『女王』であつた。彼は自らの眼を疑つた。――この指が引違ひをする筈はないに。

そのとき、スペードの『女王』が眼を窄めて、北叟笑みを漏したと見えた。その生き寫しの面影に、彼は慄然とした。……

「あいつだ！」彼は眼を据ゑて絶叫した。

チェカリンスキイは素早く手形の堆を掻き寄せた。ゲルマンは立ち竦んだまま動かなかつた。やつと彼が卓を去つたとき、人聲は一時に涌き立つた。「ああ、天晴れな勝負だつた！」と連中が卓に就きながら、口々に感嘆した。チェカリンスキイは新たに札を切つた。人々は自分の勝負に歸つた。

結び

ゲルマンは氣が狂つた。今はオブホーフ精神病院の十七號室にゐる。何を尋ねても返事はしないで、ただ異常な早口で呟くだけである――「『一』――『三』『七』『女王』……」

リザヴェータ・イヴァーノヴナは氣立の優しい或る青年と結婚した。この青年は、嘗て老伯爵夫人の家令をしてゐた男の息子で、何かの役所に勤めて相應に暮してゐる。リザヴェータは、貧しい縁者の娘を引取つて養つてゐる。

トムスキイは大尉に昇進して、例のポーリン姫を娶つた。

ピョートル大帝の黒奴

一

ピョートル大帝の命に依つて、改革後の國家には無くてならぬ知識習得のため國外へ派遣された青年らの中に、大帝自ら教父となられた黒奴イブラヒム★もゐた。彼は巴里の士官學校に學び、卒へて砲兵大尉に任じ、西班牙の役★に戰功を立てたが、遂に重傷を負うて巴里に戻つた。帝は八面六臂の煩勞のうちにも、尙その寵人の消息を尋ねることを忘れず、しかも問へば必ず帝の意を迎へて、その屢々たる進歩と方正な素行を稱讃する、阿諛の聲を耳にした。ピョートルは一方ならぬ滿悅で、彼の歸朝を促すことも一再にとどまらなかつた。しかしイブラヒムは動かうとしなかつた。彼は或ひは負傷の未だ癒えぬこと、或ひは學業の一段の完成、或ひは手許の不如意など、樣々な口實を構へた。ピョートルはその願ひを納れ、その學問熱心を嘉し、與々も健康に注意するやうに言送つた。常には手許の出費に極めて節儉であつた帝も、彼のためなら絲目を附けず、そこばくの金貨に添へて、父としての助言や細心の訓戒を與へるのが例であつた。

あらゆる史料に徵するに、當代の佛蘭西國民の輕浮、痴愚、奢侈に及ぶものは、天下ひろしと、雖もまづあるまい。官廷の尊嚴と禮節とを保つて、よく一世の峻嚴な信服を贏得たルヰ十四世晩年の治蹟は、既に泥土に委して跡形もなかつた。數多の美質とともに有りとある瑕瑾を一身に兼

ね備へたオルレアン公★は、惜しいかな外聞を顧みぬ人物であつた。パレ・ロワイヤル★の長夜の宴は、巴里に隠れもない語草であつた。のみならず、上の行ふ所に下は倣ふ習ひである。恰もこの時に、ラス★があらはれた。財慾が、逸樂放肆を渇き求める心に結び合ひ、所領は消失せ道義は地を拂つた。佛蘭西人は高笑ひしつつ錢を算へた。世を諷した流行唄の、輕薄な疊句のごとに、國は荒廢に赴いた。

その間、社會の隅々に亘つて、頗る興味深い光景が見られた。深い教養と逸樂の追求とが一に合さつて、社會のあらゆる層を接近せしめた。富、慇懃、光榮、才幹は言ふまでもなく、異樣な事柄までが、苟も好奇の火に油を注ぎ滿悅を約束するものである以上、一樣に恭しく迎入れられた。文藝も學術も哲學も、今はその靜かな書齋を見棄てて、貴顯の間に立ち現れて流行に迎合する旁ら、その意のままに流行を導いた。女性は依然として社會を支配してはゐたが、もはや神の如くに崇めよとは言はなかつた。女性に對する崇拜の念は失せ、上邊の禮讓がこれに代つたのである。近代の雅典★のアルキビアデス★とも言ふべきリシュリュー公★の亂行沙汰は、靑史にその跡をとどめて、よく當時の風を窺はしめる。

氣隨氣ままの　冥加な御代や

痴れ人痴れ行　鈴うち鳴らし
足もかろがろ　佛蘭西めぐり
信心などする　野暮ではおじやらぬ
悔いも悟りも　物のかずかは★

奇異な容貌と深い教養と、それに天賦の才智を兼ね備へたイブラヒムの出現は、巴里全都の視聽を惹いた。貴婦人連はみな『露帝の黒奴』を自宅に招かうと希ひ、爭うて彼のあとを追廻した。攝政公の夜宴に列なつたことも一再ではなかつた。彼はまた、アルエ★の輝く若年、ショリュー★の雅びな老年、さてはモンテスキューや、フォントネル★の辯舌に光彩の彌益す、數々の晩餐にも列した。何處の舞踏會にも、何人の祝宴にも、どの芝居の初日にも、彼が姿を見せぬことはなく、その靑春と南方の血の燃立つままに、一世を擧げての狂瀾に身を投じた。然しながら、イブラヒムにとつて堪へがたく思はれたのは、この逸樂の巷を棄てて、ペテルブルク宮廷の侘しさの只中へ歸らねばならぬことだけではなかつた。もつと强い絆があつて、彼を巴里に繫ぎとめた。若いアフリカ人には戀があつた。

L伯爵夫人は、すでに初花の時も過ぎながら、美貌の譽れは未だに高かつた。十七の年に修道

院を出ると、愛情の萌出る暇もない怨々のうちに現在の夫に嫁いだが、夫はそんなことに一向頓着のない性分であつた。彼女の周圍には、常に幾人かの情人が世の噂に上つてゐたが、寛容な社交界の掟のお蔭で、彼女の名は汚されることがなかつた。と言ふのは、誰一人として、彼女の情事の明らさまな姿を捉へ得たものはなかつたのである。彼女のサロンは流行の魁となり、巴里をすぐつた名流の集會場となつた。イブラヒムを彼女に引合はせたのは、若いメルヴィルであつた。これは、彼女の最近の情人として人も許し、自分でもあらゆる手立を盡して、この氣配を人に覺らせようと力めてゐた男である。

伯爵夫人は慇懃にイブラヒムを迎へたが、と言つて格別の興味を抱くとも見えなかつた。この扱ひが彼の心を探つた。常々人々はこの若い黒奴を見世物のやうに扱ひ、周りを取卷いて樣々な世辭と質問を浴びせた。この樣な厚遇の衣を着る好奇の眼は、いたく彼の自尊を傷けた。婦人の優しい眸こそは、われわれ皆の努力の殆ど唯一の的であるけれど、彼の場合は喜悅を與へぬばかりか、却つて堪へがたい悲痛と憤懣の情を催させた。彼は人々の眼にうつる自分が、不圖別世界に迷入つた何かしら珍奇な野獸、見も知らぬ特殊な動物の姿であるのを感じた。彼は人眼を惹かぬ人間を羨み、取るに足らぬ人爲りを寧ろ幸福にさへ思つた。

情の道には縁遠い生れと自分を見てゐたので、彼には毛程の自惚も自負もなかつたが、そのた

め却つて婦人に對する彼の態度は珍らかな魅力を具へてゐたと言へる。その言葉は率直で重苦しかつた。かういふ彼の姿が、佛蘭西風な機智の、相も變らぬ謎めいた言葉の戯れに飽き果てた伯爵夫人には、好もしく思はれた。イブラヒムが繁々と夫人のサロンに客となるうち、次第に夫人も若い黒奴の容貌を見慣れて、客間に滿ちた打粉の假髪の群のなかに一點の黒を點ずる縮毛頭に、遂には何かしら快よさを感じるまでになつた。頭に傷ついたイブラヒムは、假髪は着けずに頭繃を卷いてゐた。彼は二十七歳、身の丈は高く逞しかつた。彼に注がれる美人の眸には、ただの好奇とは言ひ難い柔媚の色もまじつてゐたのであるが、一度さうと思ひ込んだイブラヒムは、或ひはそれを見逃し、或ひは徒らな嬌態としか見なかつた。しかし眼が伯爵夫人の眸に合はさる時、彼の疑念は搔消すやうに失せた。彼女の眼に泛ぶ優しい心の姿を見、その取繕はぬ無心の應待に逢ふとき、最早そこに一抹の嬌態も嘲笑の影も、忖度する譯には行かなかつた。

それが戀と思ふ暇もなく、すでに伯爵夫人の姿を見ずには、一日も過せなかつた。夫人に會ふためなら所構はずに出向き、そこで首尾よく逢へると、まるで思ひもかけぬ天の引合せの樣な氣がした。伯爵夫人の方は彼よりも早く、この心を見破つた。人は何と言はうと、望みも願ひもなくて唯一筋に慕ふ心は、戀の巧みな掛引よりも一層深く女心を動かすものである。イブラヒムの居る場所では、彼女はその傍に影の如くに寄添つて、その口を漏れる言葉に聽きとれた。彼の姿

が見えないと、彼女は取りとめない物思ひに沈んで行つた。……この互ひの心の近寄りに先づ氣附いたメルヴィルは、イブラヒムに祝意を表した。傍の人のおだて言葉ほどに、戀の炎を搔立てるものはあるまい。盲目の戀は自ら信ぜぬ苦しさに、手に觸れるものは何にもあれ、氣忙はに取縋るのである。

メルヴィルの言葉は、イブラヒムを目覺ました。慕ふ女を己れの物にし得ようなどとは、この時まで夢想もしなかつた彼の胸に、たちまち希望の光が射し入つた。彼は吾を忘れて戀ひわたつた。その燃えるやうな執心に驚いた伯爵夫人が、情理を盡して愼しみを說かうと思ひ定めた甲斐もなく、彼女の意氣地の方が却つて摧けた。……前後を辨へぬ二つの心の應酬が日ごとに繁くなり、やがて彼女は、己れの手に搔立てた情炎に今は抗ふ力も盡きて、夢かと疑ふイブラヒムに身をゆだねた。

世の眼敏さの前には、何物も露はれずにはゐない。伯爵夫人の新たな情事は、やがて知らぬ人もなくなつた。彼女の物好きに呆れた婦人は寧ろ少くて、その多くは自然の成行とみなした。或る婦人は嘲笑ひ、また或るものはその輕卒を恕しがたく思つた　最初の中こそ、戀に醉痴れた二人の耳には何事もはいらなかつたが、間もなく男仲間の由ありげな戯れ言や、女連の刺すやうな誹謗の聲が聞えはじめた。冷やかに莊重な擧止のお蔭で、その時までこの種の非難の矢を身に受

けずに來たイブラヒムにとつて、それは如何にも辛く堪へ難かつたが、さりとてどう防ぎ止めよう手立もなかつた。まして世の尊敬に馴れた伯爵夫人は、己れの身を甘んじて、口さがない人々の嘲笑の餌食にするのは堪へられなかつた。彼女は泣いてイブラヒムに訴へ、切なげに怨じ、世の雜言がその身の破滅とならぬうちに、自分を棄てて呉れとせがんだ。

彼女の身の上に、更に一しほの惱みを加へることが生じた。仇情は實を結んだと知られた。伯爵夫人は蠟のやうに蒼ざめて、その懷姙をイブラヒムに告げた。樣々に言葉を盡して愼しみを彼に說いたのも、今は水の泡となつた。彼女は暗い心に、免れがたい破滅の日を待つた。

夫人の懷姙が知れ渡ると、噂はたちまち勢を取戻した。情に脆い婦人たちは、怖しさに溜息をついた。男仲間は賭をした、夫人の生むのは白か、それとも黑い兒かと。……巴里ぢうに唯一人、知りも疑ひもせぬ伯爵を歌ひ込んだ諷詩が、雨のやうに繁かつた。

宿命の時は近づいた。夫人の惱みは他所目にも痛ましかつた。イブラヒムは日ごとに夫人を訪れ、その心と身の力が日ましに衰へ消えるのを見守つた。彼女は涙と嘆きとに、片時も心の休まる間はなかつた。やがて初めての陣痛が襲うた。時を移さず手筈はととのへられた。伯爵は巧みに遠ざけられ、醫師が招かれた。この日に先立つ二日、或る貧しい女は、生み落したばかりの兒を人手に渡すやう說伏せられてゐたが、その兒を受取りに腹心の者が出て行つた。不運な伯爵夫

人の寢間に隣る內房には、イブラヒムが坐つてゐた。彼は息も詰る思ひに、微かな呻吟の聲、婢どものひそひそ聲、さては何か言附けるらしい醫師の聲を聽いてゐた。夫人の苦しみは長く續いた。呻き聲の高まる毎に、彼の胸は搔毟られた。氣配がひつそりとなる毎に、彼は物怖しさに戰いた。……不圖、かすかな生ぶ聲を耳にした彼は、吾を忘れて夫人の寢間に馳せ入つた。——黑い嬰兒が彼女の足もとに横はつてゐた。イブラヒムは近づいた。その心臟は高鳴つた。彼は打顫へる手に息子を祝福した。伯爵夫人は弱い微笑を浮べ、力ない手をさし伸べた。……

けれど、產婦の心を慮る醫師は、イブラヒムを寢床から遠退かせた。生れた子を被ひのある手籃に入れて、隱し梯子から運び去ると、入れちがひに他の嬰兒が運び込まれて同じ部屋の搖床に眠つた。イブラヒムは稍〻心も落着いたので、軈て立去つた。今は伯爵の歸りを待つばかりであつた。夜更けて歸館した彼は、夫人の安產を知つて頗る滿悅の態に見えた。このやうにして、罪な一幕を思構へた世の人々は見事當てが外れ、蔭口によつて纔かに自らを慰めることになつた。すべては元の有樣に立返つた。

にも關らずイブラヒムは、晩かれ早かれ二人の關係が伯爵の耳にはいらねばならぬ以上、何時までもこのままに泥んでゐる譯には行かぬと感じた。その曉にたとひどの樣な仕儀にならうと、所詮避け得られぬのは夫人の身の破滅である。イブラヒムは心を籠めて彼女を愛し、彼女も同じ

愛情を報いてはゐた。けれど夫人は氣儘浮氣な性分である。彼女にとつて戀はこれが初めてではない。今こそ優しい思ひに滿ちてはゐるが、何時その心に嫌氣が巢喰はうとも限られぬ。早くもイブラヒムは彼女の戀の冷める時を豫見した。これまで嫉妬を知らずに來た彼は、やがてそれを知らねばならぬ時の到來を思ふとき、堪へられぬ氣持がした。それに比べれば別離の苦しみの方が、まだまだ堪へ易からうと考へた彼は、この不運な情交を斷ち切つて巴里を去り、既に久しくピョートルも招き、己れの義務を怠る後暗さにも招かれる露西亞へ旅立たうと思ひ立つた。

二

日は積み月は重なつたが、戀痴れたイブラヒムは、慕ひ寄る女をむざむざと棄てる氣になれなかつた。夫人の愛着は日ましに深まるばかりであつた。二人の間に生れた兒は遠い片田舍に育てられた。世の噂も漸く靜まり、二人にはやつと、過ぎた日の嵐を言葉もなく思ひ出しつつ、行く末に思ひ惑はぬ、平安の日々が訪れはじめた。

或る日のことイブラヒムが、オルレアン公の館の接見式に列してゐると、通りすがりの公が立止つて、閑な時に讀むやうにと一通の手紙を手渡した。それはピョートル大帝の親書であつた。長びく彼の滯佛の眞因を察せられた帝は、自分にはイブラヒムを束縛する心は少しもないこと、

歸朝するなり留まるなりは彼の心に任せること、その孰れにせよ自分は以前の養ひ子を見棄てはせぬことなどを、親しく公に書送られたのであつた。帝の手紙はイブラヒムの肝に銘じた。この瞬間に彼の運命は決した。翌る日彼は攝政公に向つて、直ちに歸國の決心である旨を告げた。

「氣を落着けてとくと考へるがよい」と公が言つた、「露西亞は卿の故國ではない。また、卿が再びあの炎熱の故郷の土を踏まうとも思はれぬ。且つ、長らく佛蘭西に滯留した卿にとつて、今や半ば野蠻な露西亞の風土風俗は、ひとしく親しみの無いものでないのか。卿はピョートルの臣として生れたのではない。わしの言葉を信じなさい。帝の寛仁なお心に甘へて、既に卿が自らの血潮を流した國、この佛蘭西に留まるがよい。そして此の國でも、卿の功績と寄與とは、相應に報いられる所のあることを忘れぬ樣に。」

イブラヒムは心から公の助言を謝したが、その決心を枉げなかつた。

「殘惜しいが」と攝政公は言つた、「然しまた、卿の言葉も道理ではある。」公は彼の退官の取計らひを約し、一部始終を露帝に書送つた。

イブラヒムは直ぐに旅の仕度をした。出立の前の日は、例の通りL伯爵夫人の許で宵をすごした。何も知らずにゐる彼女に、イブラヒムは打明ける氣にはなれなかつた。夫人は何の氣懸りもなく、愉しげに見えた。彼女は幾度か彼を身近に呼びよせて、その沈み顏を戲れ笑つた。晩餐が

終つて客は散つた。客間には伯爵夫妻とイブラヒムが殘つた。哀れな黒奴の心は、どんなにか夫人と差向ひになることを願つたであらう。しかしL伯爵は煖爐の前にさも心地よげに座を占めて、動く樣子もなかつた。三人ながら無言であつた。

「おやすみ」と、やがて夫人が言つた。イブラヒムの胸は迫つて、遽かに別離のありとある悲哀が渦卷いた。彼は立つたまま、身動きもしなかつた。

「おやすみ、皆さま」と、夫人が重ねて言つた。

彼はやはり身動きもしなかつた。……すると急に目まひがし、頭の昏むのを覺えた。彼は漸くの事で部屋を出た。家に歸ると、殆ど無我夢中で次のやうな手紙を認めた。

『愛しいレオノーラ、御身を永久に殘して私は行きます。この手紙を書くのは、心をお傳へする外の手立もないからです。

『私の幸はこのままに續くものではありません。私は天の意にさからつて幸福に甘へたのでした。御身の戀もやがては冷めよう、幻は消え失せよう……この思ひは、御身の足許に伏しながら燃えるばかりの戀のだのしみに醉うてゐる時にも、そして何ごとも忘れ果てたと見える時にも、私につき纏つて離れませんでした。……心ない世の人々は、理には外れぬと心に許す事柄をさへ、現實には容赦もなく追窮けるのです。世の人の冷たい眸は、晩かれ早かれ御身に打克つて、御身

の胸の炎は消えませう。やがては御身も、この戀を恥づる樣になりませう。そのとき、私はどうなるでせうか。いいや、それを思へば死ぬ方が增しです。その怖しい時の來ぬうちに、お別れする方が增しです。……

『私にとつて何よりも大切なのは、御身の平安です。人目が私どもの上に繫かつたあひだ、御身は平安を味ひませんでした。御身が堪へ忍んだもの、あの汚辱、あの畏怖の苦しさを思出して御覽なさい。私達の子の怖しい誕生の日を思出して御覽なさい。私はこの上また、同じ憐み同じ危難を、御身に掛けてよいものでせうか。御身のやうに優しい人の運命を、人間と呼ぶことさへ憚られる慘めな黒奴の運命に結び合はさうと、何で力めることが入りませう。

『もうお別れです、レオノーラ。私は御身を見棄て、生涯の最初のよろこびを見棄てます。祖國もなく隣人もない私は、悲しい露西亞へ行つて、孤獨を友として日を送りませう。このの私の身を捧げる嚴しい勤めは、よし悅びと幸ひの日の惱ましい思出を全く拭ひ消しては呉れぬまでも、幾分は薄らげ和げて呉れるでせう。……では、さよなら、レオノーラ。私がこの手紙と別れるのは、御身の柔しい腕を逃れると同じ思ひです。さよなら。幸福に暮して、時たまはこの黒奴の上を、御身の瀆らぬイブラヒムの上を思つて下さい。』

その夜のうちに、彼は露西亞を指して旅立つた。

旅は思つたほどに辛くはなかつた。いつも夢が現實を制してゐたのである。巴里を遠ざかるにつれて、永久に自分の見棄てて行く物事が、益々あざやかに身近に思ひ描かれた。

知らぬ間に露西亞の國境に辿り着いた。すでに季節は秋であつた。が、道の惡さを物ともせずに、馬車は風のやうに彼の身を運んで、旅の十七日の朝方には、當時の街道を通じてゐたクラースノエ邑に着いた。

都へは二十八露里の道程であつた。馬を附ける間を憩ふため、イブラヒムは驛舍にはいつた。小舍の片隅に綠の長衣(カフタン)姿の大男が、燒物のパイプを口にくはへ、卓に肱をつきながらハンブルク新聞を讀んでゐたが、人の氣配に面を上げた。

「おう、イブラヒムだな」と、その男は腰掛を起ちながら呼ばはつた、「どうした、わしの名附け子。」

イブラヒムはピョートルと知つて、喜びに堪へず馳せ寄つたが、すぐさま恭しく立どまつた。帝は近づいて彼を抱き、額際に接吻を與へた。

「お前が歸つて來るといふ報せで、迎ひに來たぞ」とピョートルは言つた、「昨日からかうして待つて居たぞ。」

イブラヒムは胸が塞つて、禮の言葉も出なかつた。

「お前の車は」と帝が續けた、「後から蹤いて來いと言へ。お前はわしの車に乘つて、一緒に歸るのだ。」

皇帝用の無蓋の馬車が曳出された。帝はイブラヒムと同乘して馬車を走らせた。一時間半ほどで、二人はペテルブルクに着いた。イブラヒムは物珍らしげに、新たに造營された都を眺めた。それは、獨裁の賄せに應じて、沼のなかから起上つたのではなかつたか。裸はな堰堤、岸壁のまだ出來上らぬ運河、それに架した木橋などが到るところに、原始の力に打克つた人間意志の新たな勝利をしるしてゐた。家々は急造の跡をとどめ、市中を通じて壯大の名に値するものは、ネヴァ河のほかに何一つ無く、これはまだ花崗岩を疊む兩岸に飾られてはゐないが、既に夥しい軍艦や商船の群を浮べてゐた。帝の馬車は、『妃の園』と名づけられた皇宮の前に停つた。

車寄には、年の頃三十五ほどの美しい婦人が、巴里の新しい流行に身を裝うて、ピョートルを出迎へた。帝は彼女の唇に接吻し、イブラヒムの手を捉へて言つた。

「どうだ、カーチェンカ、わしの名附け子を見忘れはしまいな。ひとつ昔通りに可愛がつてやつて呉れ。」

エカテリーナ★は、黒奴の澄みかへつた黒眼にぢつと眸を凝らし、優しげに手をさし伸べた。妃の後ろには、身の丈のすらりとして、薔薇のやうに爽やかな美女が二人並んで立つてゐたが、

このとき禮儀正しくピョートルの前に進み出た。

「リーザ★」と帝は娘の一人に言つた、「お前にやらうと、オラニエンバウム★の園からわしの林檎を盜んだ、小つぽけな黒ん坊を忘れたかな。あの子がここにゐる。さあ引合せてやらう。」

皇女は微笑んで面を紅らめた。皆は食堂にはいつた。食卓は整へられて帝の歸りを待つてゐた。ピョートルは家族と一緒に卓についたが、イブラヒムにも相伴をさせた。食事のあひだ、帝は彼とさまざまな物語をした。西班牙の役や佛蘭西の内狀、また色々と非難は放ちながらも矢張り大好きなあの攝政公のことなど、次から次に尋ねた。イブラヒムの返答は、洞察の深い精確な智の閃きに滿ちてゐたので、ピョートルは頗る滿悅の態であつた。帝はまた、イブラヒムの幼時のことなどを思ひ出し、人の善い口調でさも面白げに話して聞かせた。さうしてゐる帝の姿は、心から客好きな一介の好々爺で、これが往年ボルタヴァの役★の英雄、また露西亞の改革者として、雷の如くに一世を畏怖させる力の人であらうとは、とても考へられなかつた。

食事が濟むと、帝は露西亞の習慣に從つて午睡をしに去つた。イブラヒムは妃と二人の皇女とともに居殘つて、その間に應じて巴里生活の有樣や、祭のこと、氣儘勝手な流行などを語つた。そのうちに、帝の側近の人々がぽつぽつと皇宮に集つて來た。イブラヒムは、威風堂々たるメンシコフ侯★の姿を認めた。侯も、エカテリーナと語つてゐる黒奴に氣づいたが、傲然とした横眼

を呉れただけであつた。大帝の諫爭の臣ヤーコフ・ドルゴルーキイ侯★、露西亞のファウストとして聞えた碩學ブリュース★、以前彼の友達であつた若いラグジンスキイなどをはじめ、或ひは報告書を携へ、或ひは命令を受けるため、續々として參入した。

二時間ほどすると、帝は姿を現はした。

「さあ」と彼はイブラヒムに言つた、「お前が昔の仕事を忘れずにゐるか、ひとつやつて見よう。石盤を持つて、わしに蹤いてお出で。」

帝は仕事場に閉ぢ籠つて國務を見はじめた。ブリュース、ドルゴルーキイ侯、警視總監デヴィエルと順々に引見しながら、若干の勅令や決裁をイブラヒムに口授した。帝の敏速な決斷力や、自在な眼力や、多方面な活動振りを目のあたりにして、イブラヒムは心から驚嘆しない譯には行かなかつた。仕事が終るとピョートルは衣襞から手帖を取出して、その日の豫定が全部濟んだか否かを調べた。やがて仕事場を出ながら、イブラヒムに言つた。

「遲くなつたな。お前も疲れたらうから、今晩は昔どほり泊つて行くがいい。明日の朝は、わしが起してやる。」

イブラヒムは一人きりになつて、やつと吾に歸ることが出來た。ここはペテルブルクなのだ。自分はあらためて、あの偉大な人間を見たのだ。子供の頃はまだその偉さも知らずに、彼のすぐ

身近かに日を送つたのだが。……やがて彼は、L伯爵夫人の面影が自分の心の全幅を占めなかつた日は、別れてのち今日が初めてであるのを思ひ、後悔に似た氣持とともに、この分ならば自分を待つてゐた新しい生き方、その絶間もない活動は、情慾と懶惰に疲れてひそかな憂愁をさへ訴へるこの心を、甦らせて呉れるかも知れないと思つた。偉大な人物の協力者となつて、その人とともに偉大な國民の運命に働き掛けるのだと思へば、彼の裡にもはじめて高い名譽慾が目ざめた。かうした氣持で彼は、そこに用意された野營用の寢臺に横はつたが、間もなくいつもの夢の翼は遠い巴里へ、慕はしい伯爵夫人の胸へと彼を運んだ。

三

翌る朝ピョートルは約束通りにイブラヒムを起して、その親しく隊長をしてゐるプレオブラジェンスキイ聯隊の砲兵隊附少佐に、彼が任ぜられたことを祝つた。宮人たちはイブラヒムを取圍んで、思ひ思ひの言葉でこの新たな寵臣の機嫌を取結ばうと力めた。大風なメンシコフ侯までが、親しげな握手をした。シェレメーチエフ★は巴里の舊知の消息を問ひ、ゴローヴィン★は晝餐に彼を招いた。他の人々もこの例に倣つたため、イブラヒムは殆ど一月にわたつて毎日招待を受けることになつた。

イブラヒムは單調ながら多忙な月日を送つてゐたので、退屈を知らなかつた。彼は日とともに益〻帝に近づき、愈〻深くその崇高な魂を理解した。偉大な人間の思想を追ふことは、最も興趣の深い學問ではないか。イブラヒムは、ピョートルが法院にあつて、プトゥルリンやドルゴルーキイを相手に議論を闘はせ、重要な立法案を審議するのを見た。海軍省で露西亞の海軍力を裁定するのを見た。休息の時間には、フェオファン★、ガヴリール・ブジンスキイ★、コピエーヴィチ★等とともに外國の政論の飜譯を研究し、または大小の工場を見廻り、學者の書齋を訪れるのを見た。イブラヒムの眼に、露西亞は巨大な工場とうつつた。そこに動くものと言へば悉く機械に見えた。人はみな新しい制度に從つて、それぞれの仕事にいそしんでゐる。彼もまた、自分の機械を受持つて働かねばならぬと考へ、成るべく巴里生活の逸樂の思出を忘れようと力めた。それにも增して難しいのは、あの慕はしい面影を忘れることであつた。L伯爵夫人は彼の心を繁々と訪れ、その怨言、その涙、その歎きに、彼の思ひは馳せた。……さうかと思ふと、時として怖しい考へが胸を緊めつけた。上流の人々の移り氣、新たな情交、他の情人——それを思ふと身顫ひが出た。嫉妬の心にアフリカの血潮は騷ぎ、熱い涙はその黑い頰を傳はらうとした。

或る朝、彼が書類に埋まつて自分の部屋にゐるとき、思ひ掛けなく懷しい佛蘭西語で聲高に挨拶をした者があつた。彼は振返つた。すると、彼が巴里の社交場裡に殘して來た年若いコルサーコフが、喜びの叫びを上げて抱きついて來た。

「たつた今着いたばかりさ」と彼は言つた、「着くとすぐに君の所へ駈けつけたのだ。巴里の人達が宜敷くと言つたよ。君が居なくて淋しいさうだ。L夫人からは是非歸つて來るやうにとの傳言だ。これがあの人の手紙だよ。」

イブラヒムはときめく胸に手紙を取り上げて、忘れもせぬ上書の筆蹟を見つめた。自分の眼を信じようともせずに。——

「何て嬉しいことだらう」とコルサーコフは續けた、「君はこの野蠻なペテルブルクで、よくも佗び死にをせずにゐて呉れたね。ここぢや何をしてゐるの。みんな何をやつてるのさ？　君の服屋はどの店？　もうオペラ位は出來たかしら？」

イブラヒムは放心の樣で、陛下は多分いま造船所で働いてお出でだらうと答へた。コルサーコフは笑ひ出した。

「成程ね」と彼は言つた、「君はいま僕どころの騷ぎぢやなかつたのだね。ぢや、いづれ又その內緩りと話さうよ。陛下に御挨拶をして來よう。」

さう言ひ棄てて、彼は片足でくるりと一轉し、忽ち走り去つた。

イブラヒムは一人になると、急いで手紙の封を切つた。伯爵夫人は彼の裏切りと疑心を責めな

から、優しい怨み言を綴つてゐた。

『あなたに取つて』と彼女は書いた、『私の平安こそこの世の何にも増して大切なものと仰言いますのね、イブラヒム。もしこのお言葉に僞りがないなら、あのやうな出立の悲しい知らせで、私をむごい目に合はせることのお出來な筈はありませぬ。私がお引とめするとでも思召したのでせうけれど、この私は何ほど戀に迷うたとて、あなたの幸あなたのお務めのためならば、戀の思ひはいけにへに致せたでせうのに。……』そして夫人は、その心の變ることのない旨を誓ひ、もし又と相見る日がないのならせめて時たまには手紙を、と怨じて筆を結んだ。

イブラヒムは懷しい筆の跡に吾を忘れて接吻しながら、繰返しその手紙を讀みなほした。そのうちに夫人の消息を一言でも聞きたい心に驅り立てられ、急いで軍港へ行つて、まだ居るかも知れぬコルサーコフをつかまへようと思ひ立つた。そのとき扉が開いて當の彼が再び姿を見せた。彼は謁見を濟ませて來て、いつもながら頗る愉快さうに見えた。

「此處(アシ)だけ(ル)の話(スウ)だが」と彼は言つた、「陛下は頗る附の奇人でいらつしやる。ねえ君、僕は陛下がかう麻のジャケツか何かを召して、船の檣に登つて居られる所をお目に掛つたのだよ。仕樣がないから公文書を抱へて攀ぢ上つたが、何しろ繩梯子の上につつ立つてゐるのだらう、大いに恭敬の情を致さうと思つたつて、足場がうまく取れないのさ。あんな間誤ついたことは、生れて初

めてだ。所で陛下は讀み終られると、今度は僕を頭の頂邊から爪の先まで、ぢろぢろと御覽になつた。てつきり僕の身裝の粹好みが、頗る御意に召したものと拜察したね。まあ少くも微笑をさられて、今晩の夜會(アサムブレヤ)★に出て來いと仰言つた。ところが御覽の通りのお上りさんだ。七年も留守にしてゐたお蔭で、ここの習慣はすつかり忘れてしまつたのだが、ひとつ僕の先生になつたつもりで宜しくお引廻しを願ふよ。」

イブラヒムは承知して、自分の興味の方へ急いで話頭を轉じた。

「時に、L伯爵夫人はどんな樣子だ。」

「伯爵夫人かね。勿論はじめのうちは、君の出立をひどく歎いてゐたよ。そのうちに、これも勿論、段々とあきらめて新しいアミを見附けた。それが誰だと思ふ？　あのひよろ長いR侯爵なのさ。おや、何だつて君は黒ん坊の白眼を剝くのだ？　妙だとでも思ふかね。一體君は、人間殊に女性は、長い間の悲哀に不向なことを知らないのか。まあ、よく考へて置きたまへ。僕はその間に旅の疲れでも直すとしよう。ぢや忘れずに誘ひに來てね。」

イブラヒムの魂を滿したのは、どの感情だつたらうか。嫉妬か、忿怒か、それとも落膽か。いや、それはぢつと耐へた深い悲哀であつた。彼は心に繰返した――さうなることはこの俺の目が見拔いてゐたのではないか。やがて夫人の手紙を開いてもう一度讀み直し、頭を垂れて咽び泣い

た。獣欲の聲は長く絶えなかつた。涙が胸の苦しさを和らげた。時計を見ると、もう時刻が來てゐた。イブラヒムは逃げられることなら逃げたく思つたが、夜會は義務的な性質を帶び帝は近臣の出席を强要してゐたのである。彼は衣服を改めてコルサーコフを誘ひに出掛けた。

コルサーコフはパジャマ姿で佛蘭西本を讀んで居たが、イブラヒムを見ると、「こんなに早くからかい？」と言つた。

「いや、どうして」と彼は答へた、「もう五時半だ、遲れるよ。早く着更へをして出掛けよう。」

コルサーコフは慌てふためいて力一ぱいに鈴を鳴らした。下僕たちが駈けつけて、彼は手早に着更へをはじめた。佛蘭西から連れて來た從僕が、赤い踵の靴や青天鵞絨のズボン、金絲を縫取つた薔薇色の長衣（カフタン）と次々に捧げると、もう一人が玄關で假髪に粉を振つた。コルサーコフは刈込んだ頭にそれを被りサーベルと手袋を命じ、十ぺんほども鏡の前で回（た）めつ透しつした上で、用意が出來たとイブラヒムに告げた。二人は從者の着せかけた熊皮の外套（シューバ）に包まれて、冬宮をめざして行つた。

途々コルサーコフは友達を質問攻めにした。ペテルブルク第一の美人は誰か、舞踏の一番の名手は誰か、今どんな踊が流行つてゐるかなどと。イブラヒムが嫌々ながらそれに返事をしてゐるうちに、やがて冬宮に着いた。

新奮の型をこき雜ぜて夥しい馬車や長轎の列が、さしもの芝生も所狹いまでに並んでゐた。車寄のあたりには、仕著せと口髭に身を固めた馭者、金ぴかの羽根衣に杖を携へた使丁、主人の外套や手套（テブ）を背負うた無樣な從僕、さては從卒侍童など、當代の大貴族の眼には無くて叶はぬものと見えた供廻りの衆が群をなしてゐたが、イブラヒムの姿を認めると一齊に囁き聲が涌いた——

「黒ん坊、黒ん坊、陛下の黒ん坊だ。……」彼はコルサーコフを連れて、色とりどりの下僕の間を足早に掻分けた。そして、迎引の者の手にさつと開かれた大扉を廣間に踏入つたとき、コルサーコフは思はず立竦んだ。……

一面に立罩めた煙草の雲を透して、朧ろに燃える牛蠟の光に浮びあがつた大廣間には、空色の綬を佩いた貴族たち、外國の使臣紳商、綠色の軍服姿の近衞士官、短い上衣に縞ズボンの造船技師などが、絶間のない吹奏樂の音につれて、群をなして前後左右に搖れ動いてゐる。壁際に腰を下した婦人連のなかでは、矢張り年若な方が流行の粹を凝した身裝で人目を惹いた。夜會服（ローブ）は金銀に燦めき、箍骨（わぼね）で擴げたスカートからは、女の胴がほつそりと花莖のやうに突き出て、耳の朶にも頸すぢにも、丈長髪の房のうへにも、金剛石が光を放つた。彼女たちは舞踏の時を待ちながら相手の申込を思ひ設けて、左右を顧みては笑ひさざめいた。一方老婦人達の方は、流行り廢れの裝身具をどうしたら巧みに新しい衣裳の型に配合出來ようかと、一心に心を碎いてゐた。その

小さな帽子は太后ナターリヤ・キリーロヴナ☆の黒貂帽に似通ひ、圓袍と肩布とは、どうやら昔の長衣や袖無を思はせた。彼女らがこの新たな遊樂の席に臨んで感じるのは、滿足よりは寧ろ驚駭の念らしかつた。そして、阿蘭陀の加比丹たちの娘や妻が綾織のスカートに短衣を着けて、まるで自分の家のやうに談笑しながら沓下か何か編んでゐる方を、口惜しげに横目で睨んだ。新來の客の姿を認めて、給仕が麥酒とコップを盆に載せて近づいた。

「こりやまあ、何て騒動だい」と、コルサーコフはそつとイブラヒムを顧みて言つた。イブラヒムはこの言葉に微笑を禁じ得なかつた。

皇后と二人の皇女は美々しい裝ひに一しほ臈たく見え、しきりに客の間を周旋して愛想よい言葉を振撒いた。コルサーコフは別間の帝に伺候しようと、斷れ目のない人波をやつとの事で横切つた。別間に居るのは主に外國人で、樣子振つて燒物のパイプをくゆらし、また同じく燒物の酒盃を傾けてゐた。卓の上には葡萄酒麥酒の瓶をはじめ、煙草を塡めた皮袋、ポンスの杯、象棋の盤などが見られた。さうした卓の一つにピョートルが、肩巾の廣い英吉利船長を相手に象棋を差しながら、鋭意煙草の禮砲を交換してゐた。相手の駒の動きに頗る宸襟を惱まされた帝は、コルサーコフなどが周りを何べん廻らうが、物の數ともされなかつた。そのとき、胸間に小山のやうな花束を着けた肥滿紳士が慌しげにはいつて來て、舞踏の始つた由を大音聲に呼ばはると、直ぐ

に立去つた。その後からぞろぞろと蹤いてゆく人の群に、コルサーコフも雜つた。……

思ひも掛けぬ光景がコルサーコフを再び仰天させた。泣くが如く訴ふるが如き樂の調べにつれ、廣間の端から端にかけて、婦人連と相手の騎士とが二列に分れて相對峙した。騎士が先づ低い禮をすると、婦人側は一層低い跪拜を返し、それも眞前の人を手始めに、右に向き左に向き、また眞前に次には右に、何時果てるとも見えなかつた。コルサーコフはこの思ひ附きな消閑を見て、眼を瞠り唇を嚙んだ。跪拜と會釋の應酬は半時間ほども續いた。やがてそれも歇んで、花束の肥滿紳士は儀式舞踏の終了を宣した上、ミニュエットの奏樂を樂師に命じた。コルサーコフは喜んでひそかに腕を撫した。數多い令孃たちの中でとりわけ彼の意に叶つたのは、年の頃十六ばかりの少女であつた。彼女は豪奢の中にも趣味深く裝うて、謹嚴な老紳士の傍にゐた。

コルサーコフは飛ぶやうに彼女に近づき、お相手の光榮を得たいと申込んだ。小さな美女はさも困つた樣に彼を見上げ、答への言葉を知らぬ風だつた。傍の老紳士は尙一層眉を顰めた。コルサーコフは返事を待つた。すると花束の紳士が寄つて來て、彼を廣間の眞中に連れ出して莊重な口調で告げた。

「卿よ、卿は粗相をされた。一には三つの作法を盡さずして、あれなる御令孃に近づかれた。三にはミニュエットの相手を選ぶは婦人にのみ許さるる慣はしなるを顧みず、勝手至極に振舞は

れた。この二つのことに由り、卿は『大鷲の杯』を一息に飲乾す重刑に逢はねばなりませぬ。」

コルサーコフは愈〻出でて益〻愕いた。見る見る客は彼の四圍に壁を築き、即刻の處刑を要求する聲が喧しく起つた。ピョートルはこの種の處刑に親臨するのが大好きな性分であつたから、笑ひさざめく聲を聞きつけると別間から出て來た。その姿を見て人々が道を明けたので帝は易々と人環の中にはいり、其處に罪人と、マルヴァシヤ葡萄酒を滿した巨大な杯を捧げる夜會司とが睨み合つてゐるのを見た。夜會の司は、潔く法に伏するやう若い罪人を說いたが、一向に利目はなかつた。

「ははあ」と、ピョートルは青年を一瞥して言つた、「引掛かつたな、先生。飲むんだよ、ムッシュ、顏を顰めずにな。」

もはや、絕體絕命だつた。哀れな伊達者は息もつかず大杯を乾して、夜會司に返した。

「なあ、コルサーコフ」とピョートルが言つた、「お前の股引は天鵞絨だね。わしはまだそんな奴を穿いたこともないが、お前よりはぐんと金持だぞ。それは奢りと云ふものだ。だが、わしは何もお前を叱つたのではないよ。」

この譴責の言葉を聽了るとコルサーコフは人の環を出ようとしたが、忽ちふらふらと倒れさうになつた。その有樣を見た帝をはじめ一同の滿悅は、到底筆紙に盡しがたい。そしてこの插話は

肝腎の踊の氣分や興趣を殺がぬばかりか、寧ろ一段の生氣を添へた。騎士たちは大仰な身振りで再び會釋を始め、婦人連は跪拜してそれに應へながら一しほの熱を以て可愛らしい踵を鳴らし、もう誰も間拍子などに構ふものはなかつた。コルサーコフは、樂しげな人々の仲間に加はることは出來なかつた。彼の申込んだ令孃は、父親ガヴリーラ・アファナシエヴィチ・ルジェーフスキイの差圖でイブラヒムの前に歩みより、靑い眼を伏せて恐る恐る手をさし伸べた。イブラヒムは暫く彼女を相手に踊つたのち、やがて元の席に伴れ戻すとコルサーコフの手を取つて廣間を出た。そして、彼を馬車に抱き上げて家途についた。途々コルサーコフは、始めの內こそ「夜會の奇生め……忌々しい大鷲め……」などと呟いてゐたが、間もなくぐつすり寢入つて、家に歸つたのも着物を脫がせ寢床に入れられたのも、全く覺えがなかつた。翌る朝目の覺めた彼は、しんしんと痛む頭に、跪いてする禮法や踵の音や、煙草の雲、花束の紳士、大鷲の杯などを切れ切れに思ひ浮べた。

四

その上の遠つみをやは
いと長閑にものを食しにき

泡が咲く夜久のさかづき
いと長閑に筵めぐりき
『ルスランとリュドミラ』★

扨て私は、惠深い讀者を、ガヴリーラ・アファナシエヴィチ・ルジェーフスキイにお引合せしなければならぬ。彼は上代大貴族の出で、廣大な采地を領し、客も鷹狩も二つながら愛して、家に賈く僕婢の數も夥しかつた。一言にして盡せば、彼は生粹の露西亞貴人である。その自ら言ふ所に依ると、獨逸魂は鼻持ちがならず、家の内にも力めて懷しい古代の風を保存しようとした。幼い頃に母親を喪つたその娘は、今年十七の歳を迎へた。彼女は數多の老女、乳母、附添、腰元らにかしづかれて、昔ながらの手振りに育て上げられ、金絲の縫取には長じたけれど讀書の術は知らなかつた。彼女はまた、その家に寄食してゐる俘の瑞典士官に獨逸舞踏を習はうと願つた。流石外國嫌ひの父親も、この願だけは卻けることが出來なかつた。この舞踏の先生は年の頃五十ばかり、右脚は往年ナルヴァの役★に銃創を受けてゐたので、ミニュエットやクーラント踊には適はしくなかつたが、その代り左の脚はどんな難しい歩でも、見事輕々とやつて退けた。可愛らしい弟子はよくその師を辱めず、皇帝の夜會でナターリヤ・ガヴリーロヴナの名は踊の名手として聞えてゐた。この事が幾分は、コルサーコフの過失の因をなしたと思はれる。彼は翌る日早速娘の父親に詫びに來た。しかし、この尻の輕い伊達者の浮薄な物言ひに尊大な貴族は眉をひそめ、忽ち佛蘭西猿と綽名した。

或る祭の日のこと、ガヴリーラ・アファナシエヴィチは親戚や朋友を招いた。古風な廣間の長い卓に飲食の仕度が整へられた。招かれた客は『家事勅令』と帝自らの手本のお蔭で、永年の籠居を解かれた妻や娘を伴つて參集した。ナターリヤは銀の盆に黄金の杯を載せて客の間を配つて歩いたが、それを乾す客の心の中には、この様な際には一々接吻の添物があつたといふ昔のことが殘惜しく思ひ出された。やがて一同は食卓についた。主に隣る一番の上席にはその舅ボリス・アレクセーヴィチ・ルィコフが坐つた。これは齡七十に及ぶ大貴族である。他の客は席爭ひの懷しい思ひ出をひそかに心に描きつつ、男子と女子は兩側に分れて門地の順に居並んだ。末席には昔風の紅い上衣に頭巾を着た老女をはじめ、見得坊の癖に若襞だらけな侏儒女、着古しの青い軍服姿の俘の瑞典人などが定めの席に畏つた。所狹いまでに器を並べた食卓のまはりを、忙し氣に立動いてゐる數多の召使の中に、眼光鋭く腹のせり出た家令の威嚴を作つて動かぬ姿が、一際目に立つた。始めのうち一同の注意は、この家の昔流儀な板前の味に吸取られて、忙しいスプーンの皿に觸れ合ふ響のみが部屋の沈默を亂してゐた。やがて主はそろそろ談笑の時刻と見てとつて、

傍を顧みて尋ねた。

「エキーモヴナはどうしたね。呼んでお出で。」

召使の幾人かが思ひ思ひの扉から走り出ようと身構へたとき、紅白粉を塗り立てた婆さんが、頸すぢも胸も露はな絹地の圓袍（ローブ・ロンド）を花や金銀の箔に裝うて、鼻唄に合せて踊りながらはいつて來た。その姿を見ると一同は忽ち調子立つた。

「御機嫌よう、エキーモヴナ」とルィコフ侯が言つた、「その後どうかね。」

「氣も達者なら身も息災で、はい。歌も唄へば踊りも交ぜて、花聟どのを心待ちして。」

「どこに匿れてゐたのだね、道化さん」と主が尋ねた。

「お艶（めい）しを致して、はい。お目出度いお祭に、皆さまお揃で御座いますもの。天子様の大御言、大殿様のお差圖畏み、この世の限りのお笑草に獨逸好みをせいぜいと。」

この言葉に皆は大笑ひをしたが、道化は澄して主の椅子の後に立つてゐた。

「總じて道化と云ふものは、仰山嘘もつきますけれど、たまに言當てることもあるもの」と、兼々主の尊崇を得てゐる姉のタチヤーナ・アファナシエヴナが言つた、「ほんに今日のお艶（めい）しは、この世の限りの笑草。ですが皆様もいざそのお鬚を剃落して、尻切（しき）れ長衣（カフタン）でも召して御覽なら、もう二度と女の襤褸のごとなど、兎や角は申されますまいよ。それどころか鄙びた長衣（サラファン）や娘共の

リボンや、百姓女の頭飾りが、しみじみ哀れと思はれませう。思うても可笑しく氣の毒なは、今どきの美人の身裝ざま。折角の髪はまるで羊の毛のやうに縮らせて、やれ香油だ、やれ佛蘭西髪粉だのと申して。それにお腹は千切れさうに緊めますし、下袴は籠か何ぞで無理やりに擴げて。あれで馬車に乘つた姿は大樽そのまま。戸口を入るにも身を捩曲げて、立つも坐るも、息をするさへ叶はぬ樣子。ねえ皆様、あれこそ本當の殉教者ですこと。」

「如何にも仰せの通りですが」と、キリーラ・ペトローヴィチなにがしが言つた。これは以前リャザンで知事をしてゐる間に三千の農奴の附いた地面と若い妻とを、それも二つ乍ら氣の咎める遺口で手に入れた男である、「私に言はせれば、たとひ乞食女の裝（なり）をしようが支那皇帝の振をしようが、それは女房の心任せです。ただ願ふ所は、毎月の樣に新しい着物を誂へて、元の奴はまだ眞新しいのに打遣るのは止して貰ひたいですな。昔は、お祖母さんの長衣（サラファン）が孫娘の嫁入道具に結構間に合つたものでしたが、今はどうでせう。今日奥樣のお手を通した圓袍（ローブ・ロンド）か、明日は女中の仕著せになる始末ですからな。困つたものです、これぢや露西亞の貴族は追つつけ土崩瓦解ですな。いや、何ともはや。……」

さう言ひながら溜息をして、妻のマリヤを顧みたが、彼女は昔の讃美も今樣の惡口も、ともに氣に染まぬ風に見えた。他の美女達も同じ不滿を感じたけれど、まだ當時は内氣が若い婦人に無

くてはならぬ德とされてゐた時分だから、誰も何も言出さなかつた。

「だが、一體誰の罪ですかな」と主が、酸酒の壺を泡立たせながら言つた、「われわれが惡いのではないか知ら。若い婦人に莫迦な眞似をさせて、大目に見てゐるのは一體誰でせうか。」

「お言葉ですが、あれ達が勝手にやることを、このわれわれにどうする事が出來ませう」と、キリーラ・ペトローヴィチが言返した、「女房を屋根裏に閉籠めたい人もあるでせうが、一方では鳴物入りで夜會へお召しですからな。亭主は鞭、女房は着物とはこの事ですよ。ああ、夜會、夜會。思ふに天はわれわれ積罪の罰として、夜會を下されたのですな。」

マリヤは針の山に坐る氣持であつた。舌がむづ痒くなつて我慢がならず、やがて夫に厭味な微笑を投げながら、夜會に何か惡いことでもあるのかと尋ねた。

「ある所ではないぞ」と、夫は眞赤になつて答へた、「あれが始つてからと言ふもの、女房が亭主を負かす。『妻は夫をば畏れ――』あの使徒のお言葉は忘れてしまふ。家の事は投げ放しで、新しい着物の心配をする。夫の機嫌を取結ぶ所か、暇さへあれば輕薄士官どもの方ばかりに氣を取られる。ええ令夫人、苟も露西亞の大貴族なり貴族夫人ともあらうものが、獨逸の煙草屋連中や女工仲間と、同席する法があるものだらうか。眞夜中までも踊狂つたり、若い男と話をしたり、こんな事は前代未聞だ。それも親戚ならまだしも、知りもしない赤の他人と。」

「壁に耳ありとか申しますよ」と、主が苦い顏をして言つた、「が正直のところ、私もあの夜會は氣に喰ひませんので。もしや醉拂ひに突當りはしまいか、もしや醉拂ひの方から、笑談に酒を押附けて來はしまいか、もしや粗忽者が娘に何か惡戯を仕掛けはしまいかと氣の休まる暇もありません。今どきの若い人達は、何とも始末に負へませんからな。それ手近なよい例が、あの亡くなつたエヴグラフ・セルゲーヴィチ・コルサーコフの息子ですよ。この前の夜會の折に、ナターシャの事で大騒動を持ち上げてしまつて、この私まで顏が赤くなりました。あの翌日ふと庭を見ると、意氣揚々と乘込んで來る男がある。おや誰だらう、アレクサンドル・ダニーロヴィチ侯かなと思つてよく見ると、それがあの先生でした。車を門で停めることも、玄關まで歩くことも出來ないと見えますね。いやはや、飛んでもない男です。で跳び込むなり、お辭儀は仕散らかす、話は仕散らかす、何とも助からん仕儀でした。このエキーモヴナまでが、至極面白くあの男の眞似をしますよ。道化さん、序でに舶來猿を演つて御覽。」

彼女は鉢の蓋を取ると帽子の心で小脇に挾んで、顏を歪め足を踏み鳴らし、「ムショー……マムゼリ……アサムブレーヤ……パルドン」☆などと言ひながら、四方八方へお辭儀をはじめた。客は頗る滿悅して、暫くは笑聲が絶えなかつた。

「あの男に生寫しだわい」と、騒ぎが稍靜まりかけたとき、老侯ルィコフが嬉し涙を拭きなが

ら言つた、「罪は匿るるなしぢや。唐國から河原者に成下つて歸國したのは、何もあの男に始まつたことではない。何を習ひに出掛けるのやら——奇妙な辭儀をしたり何やら譯も分らぬ土語を操つたり、長上を敬はず他人の妻を口説くことだけぢや。留學して戻つた若者の數ある中で先づ人間並なは、情無いかな、陛下の黒ん坊一人ぢや。」

「まあ、侯爵樣は何を仰言るやら」と、タチヤーナ・アファナシエヴナが言つた、「私はこの眼で近々と見ましたの。あの口附の厭らしさと申したら、思はず總毛立つてしまひました。」

「いや、全く」と、主が言つた、「あの男は眞面目でもあり中々の律義者で、輕薄兒どもの遠く及ぶ所ではありませんな。……おや、また誰やら門内に乘り入れたな。あの舶來猿ではないか。お前らは何をしてゐる」彼は召使を顧みて言葉を繼いだ、「大急ぎで斷つて來い、して今から後はもう……」

「殿樣には御毫碌と拜せられます」と、道化のエキーモヴナが遮つた、「それともお目が潰れたのか知ら。あの轡の音は天子樣のもの、陛下の御入來で御座いますよ。」

ガヴリーラ・アファナシエヴィチは急いで座を起つた。皆は窓際へ馳せ寄つて、本當に帝が從卒の肩に助けられながら、車寄の段を上る姿を見た。廣間は忽ちごつた返した。主は出迎に走り召使は氣でも狂つた樣に馳せ交ひ、客たちは身顫ひして、中には何とかして拔け出さうと周章へ

る者もあつた。そのときピョートルの雷の樣な聲が前房に響き渡り、急に四圍を領した沈默の中を、ひたすら恐懼してゐる主に伴はれて帝が姿を現した。

「皆、御機嫌よう」と、ピョートルは明るい顏附で言つた。

一同が低い禮をする間に、帝の素早い眸は主の娘の上にとまつた。帝は彼女を招いた。ナターリヤ・ガヴリーロヴナは臆した風もなく進み出たが、紅は兩の耳ばかりではなく、肩のあたりまで流れた。

「ますます美人におなりだ」と帝は言つて、いつもの通り彼女の髮に接吻を與へたが、直ぐに皆の方を振返つた、「これはお邪魔をしましたな。食事はまだ濟まぬ樣子、遠慮なしに續けて下さい。私には、ガヴリーラ・アファナシエヴィチ、茴香酒を貰はう。」

主は嚴めし氣に控へた家令の手から盆を受取り、自ら黃金の杯を滿して恭々しく帝に捧げた。ピョートルは一息に飲乾し乳麪包を撮んで、再び皆に食事を促した。一同は元の席に戻らなかつた。ピョートルは主の隣に坐つて野菜スープを求めた。すると從卒が象牙を鑲めた木匙と、綠の骨梗の附いたナイフとフォークを帝の前に置いた。決して他人の食器を使はぬのがピョートルの習慣であつた。

今しがたまで歡笑涌くが如くであつた食事は、沈默の裡に餘儀なく續けられた。主は光榮と悅

びとに胸を詰まらせて、何も口へは運ばなかつた。客も皆固くなつて、帝が俘の瑞典人を相手に獨逸語でされる一七〇一年の役の昔話に、謹んで耳を澄した。道化のエキーモヴナは若干の帝の質問に、臆しがちな冷やかさで返事をした。その樣子で見ると彼女は根からの虚け者でないらしいことを、序でながら記して置く。やがて食事は終り、帝が起上ると皆一齊にそれに倣つた。

「ガヴリーラ・アファナシエヴィチ」と帝が主に言つた、「別間で話したいことがある。」

さう言ふと彼は主の手を取り、客間に連込んで扉を閉ぢた。殘された客は暫くのあひだ、思ひ掛けぬ帝の訪問のことを小聲に判じ合つてゐたが、やがて萬一の不敬を慮つたのか主に禮を述べる暇もなく一人去り二人去つて、後には舅と姉と娘の三人が、客をそつと閾際まで見送つたのちも食堂に居殘り、帝が出て來られるのを待受けた。

五

半時間ほどして扉は開き、ピョートルは出て來た。待受けた家人の三度の跪拜に帝は重々しい會釋を返しながら、眞直に前房へ歩を運んだ。主は帝の背から紅に染めた毛皮の外套を着せ掛け、橇の傍まで見送つた。一たん車寄にはいつた彼は、其處で改めて行幸を深く謝した。

ピョートルの橇は去つた。

食堂に戻つたガヴリーラ・アファナシエヴィチの面には、心痛の影が讀みとられた。不機嫌な樣子で召使に後片附を急ぐ樣に命じ、ナターシャを部屋に引取らせたあとで、姉と舅に向つて內內の話のある由を告げ、食後には必ず休息を取る慣はしになつてゐる寢所へと二人を導いた。老侯は懈材の寢臺に横はり、タチヤーナは足臺を引寄せて絹の肱椅子に腰を下した。ガヴリーラは部屋ぢうの扉に錠を下し、さてルィコフ侯の足許に席を占めると小聲に語りはじめた。

「陛下が見えられたのは譯があつてでした。何の話をされたか、御想像がつきますか。」

「どうして私達に分るものですか、お前」と、タチヤーナが言つた。

「知事でもする樣にとの御內意ではなかつたのかな」と舅は言つた、「もうよい時分ではないか。それとも全權公使かな。え、だつて外國へ遣はされるのは何も秘書役だけに限つたことはなく、隨分と位の高い人も行く樣だからな。」

「いいえ」と、婿は眉根を寄せて答へた、「私はもう一時代前の人間です、今更に宮仕へでもありますまい。たとひ今では露西亞の正教貴族の値打が、乳臭い新參者だの、輕燒屋、回教信者なども同然に下落したに致しても。……だがこれは、そんな話ではないのです。」

「では、陛下があんなに長いことお前に話されたのは」と、タチヤーナが言つた、「一體何なのでせう。もしやお前の身に、何か惡いことでも持上つたのでは。……」

「惡いことと云ふ程でもないが、兎に角思案ものなのです。」
「と云ふと、つまり何でせう。」
「ナターシャのことですよ。陛下はあれの嫁入のことで、わざわざ見えたのです。」
「まあ、どうでせう」と、タチヤーナは十字を切つた、「昔から嫁入先も仲人次第と言ひますよ。何といふ有難いことでせう。して陛下は誰に遣れと仰せなの。」
「いや」と、ガヴリーラ・アファナシエヴィチは咳拂ひした、「その相手ですが……」
「ふむ、その相手がな」と、もう居睡をはじめたルィコフ侯が鸚鵡返しに呟いた。
「當てて御覽なさい。」
「お前はさうお言ひだけど」と、年老いた姉が答へた、「何で私たちに言當てられませう。宮中には好い花聟も數あることだし、あのナターシャなら、誰も否やは言ふまいものね。ドルゴルーキイでもあるの？」
「いいえ、あれではありません。」
「それはよかつた、大風な人だものね。では、シェイン？　それともトロエクーロフか知ら。」
「さうでもありません。」
「あれ等もどうも氣に喰ひませんよ。ふはふは者だし、それに獨逸かぶれがしてゐてね。ぢや、

ミロスラフスキイ？」
「それも違ひます。」
「やれやれ。あの人はお金はあるけれど少し此處の所が足りないものね。ぢや、エレツキイ？　リヴォフ？　それとも、あのラグジンスキイ？　もう勝手におし、とても考へ附けやしない。ねえ、陛下は誰に遣れと仰せなの？」
「黒ん坊のイブラヒムです。」
老婆は「まあ」と言つて、思はず兩手を打合はせた。ルィコフ侯は枕から頭を持上げて呆れ聲を出した、「あの黒ん坊にだと？」
「おお、厭らしいこと」と姉が潤み聲で言つた、「それではあの子が可哀想ですよ。ナターシャを、あんな黒ん坊の爪に懸けることはなりません。」
「その事ですが」と、ガヴリーラは言葉を返した、「今さら御辭退が出來ませうか。もし承知して呉れるなら、末長く一門の面倒を見てやらうと仰せなのに。」
「正氣の御沙汰かな、それは」と、もう居睡どころでなくなつた老侯が言つた、「可愛いい孫を、金で買はれた黒ん坊の所へ遣るといふのは。」
「あれの出は卑しいものではありません」と、ガヴリーラが言つた、「小さいながらも、歴乎と

した黒人國の公子です。それが敵の手に落ちて、ビザンチンの都に賣られた所を、露西亞公使が買取つて陛下に獻上したのです。何でもあれの兄と言ふのが、莫大な身代金を抱へて遙々やつて來たさうですが……」

「いえいえ、お前」と、老婆は遮つた、「浦島や鬼ヶ島の話☆はもう澤山。それより、陛下に何とお返事申上げたの。」

「何事も、宏大無邊なる吾君の御心のままにと。」

そのとき、扉の蔭で物音がした。ガヴリーラは起つて行つて開けようとしたが、何か閊へるものがあつた。力一杯に押しやると扉は開いて、血に染んだ床のうへに、ナターシャが氣を失つて、倒れてゐた。

帝が父親を伴つて別間にはいつたとき、彼女は氷のやうなものが身中を走るのを覺えた。少女の敏い心に、彼女はそれが何か知ら自分の身に關はる事柄だと見拔いた。やがて父親が彼女を引取らせ伯母や祖父と一間に閉籠つたとき、彼女はもう自分の心を抑へることが出來ず、そつと內部屋を拔けて父の寢所の扉に忍び寄ると、三人の怖しい話の一部始終をひと言も聞漏さなかつた。そして父の最後の言葉を耳に聞くと哀れな娘は氣が遠くなつて、倒れる拍子に自分の嫁入道具のはいつた鐵の櫃に、頭を打ちつけたのである。

馳せ集まつた召使がナターシャを抱き起して、部屋に運んでその寢臺に寢かした。暫くして彼女は氣が附いて眼を開いたけれど、父親の顏も伯母の顏も見別ける力はなかつた。忽ち激しい熱が出た。彼女は夢うつつに大帝の黒奴のこと、嫁入りのことなどを口走つてゐたが、不意に鋭い聲で、訴へるやうに叫んだ、「ヴァレリヤン、私のヴァレリヤン、助けて……ああ、あの人達が、あの人達がそこに……」

老いた姉は不安氣に弟の顏を見た。彼は見る見る蒼ざめて、唇を嚙み默つて出て行つた。奥の階段が上れぬので下に殘つてゐた老侯が、戻つて來た彼に尋ねた。——

「樣子はどうかな。」

「よくない樣です」と、傷心の父親は答へた、「思つたより惡いのです。夢のなかで、ヴァレリヤンの名を呼んでゐます。」

「そのヴァレリヤンとは何者だな」と、驚愕した老人が尋ねた、「まさかお前が昔養つてゐた、あの獵兵の孤（みなしご）のことぢやあるまいな。」

「面目次第もありません」と、ガヴリーラが答へた、「實はあれの父親が、一揆騷ぎのとき私の危い所を助けて呉れたのが因緣で、ついあの忌々しい奴を引取るやうな破目になつたのですが、二年ほど前、あれが軍隊にはいりたいと言ひますので許して遣りました所、その出立のときナタ

ーシャが泣いて別を惜みまして、あれもまるで化石した様につつ立つて居りました。少し妙に思はれたので當時姉にも話して置きましたが、それきり娘は一言もあれの事は申しませんし、またあれの消息もその後絶えてありません。で、忘れて呉れたものと思つてゐましたのですが、矢張り今でも。……かうなつた上はもう極りました。思ひ切つて黒ん坊に嫁がせませう。」

ルィコフ侯は最早抗はうとしなかつた。よし抗つて見た所で甲斐はないに違ひない。彼は饗館した。タチヤーナは姪の寢床の傍を離れなかつた。ガヴリーラは醫師に使を走らせると、自分は部屋に籠つてしまつた。邸内は寂として憂色が垂れこめた。

意外な縁談は、少くも娘の父親を愕かした位にはイブラヒムをも愕かせた。

前に述べた夜會の宵ののち數日して、ピョートルは書類から眼を上げてイブラヒムに言つた。

「お前は何だつて沈み込んでゐるのだ。何が不足なのか、遠慮せずに言つて御覽。」

イブラヒムは、自分の地位に何一つ不足はない由を、きつぱりと答へた。

「よし」と帝は言つた、「是ぞと言ふ譯もなしにそんな顏をしてゐるのなら、わしがひとつ癒してやらう。」

やがて仕事が濟んだとき、ピョートルはまた尋ねた、「此間の夜會で一緒にミニュエットを踊つ

た娘を、お前はどう思ふな。」

「大層可愛らしい方とお見受け致しました。しとやかで氣立のよい方と。」

「さうか、ではあの娘と仲好しにしてやらう。あれを嫁に貰ひたいか。」

「私がで御座いますか、陛下。」

「まあ聽け、イブラヒム。お前は門地も身寄りもない一人ぼつちな男だ。このわしを除けば、あとは皆赤の他人だ。今日にでもこのわしが死ねば、明日のお前はどうなる事だらう。わしの眼の黒いあひだに早く身を固めることだ。それも、露西亞の大貴族(ボヤーリン)に婚を通じて、支への柱を手に入れるのだ。」

「陛下」と、黒奴は聲を詰まらせた、「陛下の御庇護と御慈愛を頂いて、この私は天下の果報者で御座います。私は、大恩ある陛下をお見送り致したくは存じません、これが私の唯ひとつの望みで御座います。また、たとひ嫁取を考へたに致しても、先方の娘も親も承引致さうとは存ぜられません。この顏附では……」

「顏附だと。何を莫迦なことを言ふ。お前の立派な若者振りに、指をさせはせぬぞ。娘は親の言ふことを聽くものだ。して、このわしが仲人に立つと聞いて老いぼれのルジェーフスキイが何と言ふか、まあ見てゐるがよい。」

さう言つて帝は橇の用意を命じ、深い物思ひに沈むイブラヒムを殘して去つた。

「嫁を貰ふか」と、黒奴は考へた、「それが何で惡い？　地球の目盛のちがつた所に生れた、ただそれしきの事で、一人ぼつちの生を送り、この上もない心の慰めまた至聖至高の人の倫を知つてはならぬと言ふのか。女の愛など分に過ぎたことだと？　ええ、子供の譫言だ。だが愛とは、愛を賴むことが出來ようか。女の淺い心のなかに、愛が住まうと思へようか。柔しい迷の道はふつつり思切つて、物の本質に根ざした別の蠱惑に、身を任せた俺ではないのか。だが、身の行末を考へよとのあのお言葉も本當だ。ルジェーフスキイの娘を貰へば露西亞貴族の片割れとして、この新しい祖國に俺も他所者ではなくなるのだ。俺は妻に愛は求めまい、貞節だけで澤山だ。そしてこつちから卑下り大切に信用してやりさへすれば、仲好くぐらゐはして呉れよう。」

イブラヒムは平常通りに仕事に掛らうとした。が、それからそれへと氣が散るばかりなので、やがて書類を見棄ててネヴァの岸を當途もなく逍遙した。不意に彼はピョートルの聲を聞いた。振返ると、帝は橇を降りて愉快さうな顏で近寄つて來る所であつた。

「萬事濟んだぞ」と、ピョートルは彼の手を取つて言つた、「仲人役はこれでよい。明日になつたら自分で舅の所へ行つて來るのだ。だが氣を附けるのだぞ、奴の貴族の誇を巧く摩つてやれ。橇は門の所で乘り棄てて、二本の足で庭を突切るのだ。會つたら、奴の手柄と家柄を持上げる。

すると忽ちお前にぼおつとなるに極つてゐる。……そこで」と、彼は杖を振りながら語を續けた、「あの騙りのダニールィチの所へ一緒に行かう。今度は奴のお惡戯を一つ取つちめて遣らなくちやならん。」

イブラヒムは心から、帝の慈父も及ばぬ心遣ひに感謝を捧げた。そして帝をメンシコフ侯の宏壯な御殿まで送つて行き、別れて家に戻つた。

六

玻璃の聖匣の前に御燈が靜かに燃えて、その中には先祖代々傳はる聖畫像の緣が金銀にきらめいてゐる。搖らぐ火影に、帷を下した寢臺と小卓のうへの藥瓶とが、仄かに浮びあがる。煖爐の傍には一人の婢が手繰りの絲車を廻して、その軸の微かな軋み聲のみ、小部屋の靜寂をみだしてゐる。

「そこにゐるのは誰？」と微かな聲がした。その聲に婢は立つて行つて寢臺の帷を揭げた。

「もう夜が明けるの？」ナターリヤが尋ねた。

「やがてお午で御座います」と婢は答へた。

「ああ。どうしてこんなに暗いの？」

「お窓が閉つて居りますの、お嬢様。」

「ちや、すぐに着物を着更へませう。」

「いいえ、お嬢様。お醫者様のお言附で御座いますから。」

「私は病氣なの？　何時から？」

「もう二週間まへから。」

「本當に？　私にはまた、つい昨日のことの様に思はれるのに。……」

ナターシャは口を閉ぢて散り散りの思を攝集めようとしたが、何事か起つた様に思はれながら、それがどうしても思出せなかつた。婢は言附を待つて佇んでゐる。そのとき階下から鈍い物音が傳はつた。

「あれは何？」と病人が尋ねた。

「皆様が食堂をお立ちで御座います」と婢が答へた、「追つつけタチヤーナ・アファナシエヴナがお見えになりませう。」

ナターシャは嬉しげな様子を見せた。そして力無い手を振つたので、婢は再び絲車に坐つた。暫くすると幅廣の白い頭巾と地味なリボンが扉を覗いて、忍びやかに尋ねた、「ナターシャの様子はどう？」

「伯母さま、御機嫌よう」と、靜かに病人が言つた。

タチヤーナは急ぎ足で寢臺に近寄つた。

「お氣がお附きになりました」と、婢は注意深く肱椅子を押しやりながら言つた。

老婆は涙を浮べて、姪の蒼ざめ衰へた頰に接吻して傍に腰を下した。その後から、學者風な假髪に黒の長衣（カフタン）姿の獨逸人の醫師がはいつて來てナターシャの脈を取つたが、やがて既に危險の去つた由を先づ羅典語で、次に露西亞語で告げた。醫師は紙とインク壺を求め、新しい處方を書きつけて去つた。タチヤーナも立上つて再び姪に接吻すると、この吉報を階下の弟に齎さうと急ぎ足で出て行つた。

客間には軍服を着け飾を佩いた大帝の黒奴が、軍帽を膝に載せて恭々しく主と話をしてゐた。コルサーコフは柔かな長椅子に身を伸して、二人の話に聞くともなしに耳を傾ける合間には主の自慢のボルゾイ犬と戯れてゐたが、やがてそれにも厭きると、退屈な時の避難所にしてゐる鏡へと近づいた。すると鏡の中に、タチヤーナが扉の蔭に立つて弟の方へ人知れず合圖をしてゐる姿が映つた。

「呼んで居られますよ、ガヴリーラ・アファナシエヴィチ」とコルサーコフは、イブラヒムの話を遮つて主に言つた。ガヴリーラは直ぐに座を立つて行き、自分の後に扉を閉めた。

「君の忍耐强いには降參だ」とコルサーコフは友達に言つた、「丸一時間といふもの、ルィコフ家やルジェーフスキイ家のいとも古い門地談義を聽かされて、おまけに如何にも尤もらしい合槌を打つてゐるのだからな。まあ僕だつたら、あの老耄れたお喋り屋も門地も、それから勿體らしく假病か何ぞ使つてゐる——いや『蒲柳の質』におはすナターリヤ姫も、一切合財御免を蒙つて逃げ出すね。さ、白狀し給へ、君はあの小ちやな氣取屋に本氣で參つてゐるんだらう。」

「いや」とイブラヒムは答へた、「僕が結婚しようと思ふのは一時の情熱に驅られたのぢやない。熟慮の上での事なのだ。それももしあの人が、どうしても厭だと言ふなら止めるさ。」

「ねえ、イブラヒム」と、コルサーコフは言つた、「一度でいいから僕の忠告を聽き給へ。かう見えても、僕はなかなか善智識なんだから。君の氣紛れな考へを拋つて、この結婚は止めるのだね。あの許嫁の君の方では君に何の思召もないことを、僕はちやんと睨んでゐるのだ。本當に何が始まるか分つたものぢやないよ。例へばこの僕にしてもが根が惡者でもない癖に、それで人の女房を寢取るやうなことになつたのも一再ならずだ。しかもその夫連中を見ると、誰一人僕に引けを取るやうな人物はないのだから驚くね。君にしたつて、あの巴里のL伯爵のことはまさか忘れまいね。女に誠を求めてはいけない、そんな事には冷淡に構へてゐるのが幸福人だよ。おまけに君は、失敬だがその陰氣で燃え易く、しかも疑ぐり深い性格と獅子鼻、膨れ上つた唇、かてて

加へて縮くれ上つた髪の毛を以て、尙且つ結婚生活の危險を冒す勇ありやだね。……」

「御忠告はありがたう」と、冷やかにイブラヒムは遮つた、「だが、他所の兒は搖るに及ばぬ、と言ふ諺があつたね。」

「はは、イブラヒム」と、コルサーコフは笑ひ出した、「まあ、後になつてその諺を文字通り實證しない樣に賴むよ。」

そのとき、隣の間の話が熱して聞えはじめた。——

「あの子の命を取るも同じことですよ」と老婆が言つた、「あのご面相では、どうして我慢がなるものですか。」

「いくら仰言つても」と、弟が讓らずに言張つた、「もう二週間も花聟として通つて來るのに、まだ一度も花嫁を見せないのですからな。仕舞ひにはあれの病氣が實は假病で、詰り何とかして逃れたいばかりに、ずるずる引摺つてゐるのだと思はれても仕方がありますまい。それに陛下が何と仰言ることでせう。もう三度も、あれの病氣見舞を寄越されたのですよ。貴女は貴女で御勝手ですが、私は陛下に逆ふ心は毛頭ありません。」

「ああ、どうしませう」とタチヤーナが言つた、「可哀さうに、あの子はどうなるだらう。ぢやせめてこの私に、あの子の心の用意をさせて下さい。」

ガヴリーラは承知をして客間に戻つた。――

「有難いことに」と、彼はイブラヒムに言つた、「やつと危險は去りました。大分氣分も宜しい樣子です。で、もしやイヴァン・エヴグラーフォヴィチ氏に對し餘り失禮に當らぬ樣でしたら、ひとつ奥に御案内して、あれに會つて頂かうと存じますが。」

コルサーコフはそれを聞くと先づ祝詞を述べ、どうぞ御遠慮なくと告げた。それから他に用事があるからと言つて、主の見送りを押戻しながら、玄關へと走り去つた。

その間にタチヤーナは、この怖しい訪客を迎へる覺悟をさせるため姪の寢室へ急いだ。けれど部屋にはいるとその氣も挫けて、寢床の傍に坐り溜息まじりにナターシャの手を取つた儘、まだ一言も言ひ出さぬうちに扉が開いた。

「誰方が見えて？」とナターシャが尋ねた。

老婆は死人のやうに口が利けなくなつた。ガヴリーラは帷を揭げて、冷やかな一瞥を寢れた娘に加へながら、氣分はどうかと尋ねた。彼女は微笑まうとしたが、何時にない父親の嚴しい眸に逢ふと心は怯えて、微笑の代りに不安がその面をとざした。そのとき彼女は、誰やら怖しい人影が枕頭に立つのを見、やつと頭をもたげて、それが思ひもかけぬ大帝の黒奴であるのを知つた。あらゆる記憶が甦るとともに、行く先の恐怖がまざまざと彼女の前に立上つた。しかし疲れた魂

は、露はな激動を受け附けなかつた。ナターシャは再び頭を枕に落し、眼を閉ぢて自分の病んだ心音に耳を澄した。その樣子を見たタチヤーナは、病人が眠りかけてゐると弟に目顔で知らせたので、皆は部屋を出て行き婢は再び絲車に向つた。

やがて眼を開いた哀れな美女は、もう誰も居ないのを知ると、婢を招いて例の侏儒女を呼びにやつた。が、そのとき毬のやうに肥つた大きな赤兒は早くも寢臺の下に轉び寄つた。『燕むすめ』と呼び慣はされたこの侏儒女は、主人とイブラヒムの後から、その短い足で一生懸命に階段を駈け上り、世の女性の他聞に漏れぬ好奇の耳を欹てながら、扉の蔭に身をひそめてゐたのである。ナターシャは彼女の姿を見ると婢を遠ざけた。侏儒女は寢床の下の足臺に腰をかけた。

この小さな肉體に、彼女ほどの豐かな精神力の秘められてゐるのは、前代未聞の事に屬する。彼女の知らぬ事はなく、嘴を容れぬことはなく、世話を燒かぬことはなかつた。彼女の拔目ない上手な立廻り振は、主筋の愛を得る一方ではその身勝手な支配に甘んぜぬ召使みなの憎惡を買つてゐた。ガヴリーラは彼女の言附口も不平も、下らぬ願事までも一々聽屆けてやつた。タチヤーナは絶えず彼女の意見を糺し、その勸めに從つて動いた。ナターシャに至つては心の底から彼女に懷いて、十六歳の心の動きも思案事も殘らず彼女に打明けた。

「ねえ、燕さん」と彼女は言つた、「父樣は私を、黒ん坊の所へお遣りになるのだよ。」

侏儒は深い溜息をついて、皺だらけの顔をなほ皺だらけにした。

「もうどうしても駄目かしら」と、ナターシャは續けた、「父様は私を可哀相とは思召さないのか知ら。」

侏儒は小さな頭巾を振つた。

「お祖父様か伯母様かが、私の味方になつて下さらないか知ら。」

「駄目ですの、お嬢様。御病氣のあひだにあの黒ん坊は、うまいこと皆様を誑しましたのですよ。殿様はすつかり夢中におなりですし、侯爵様も今ではもう明けても暮れても、あの男のことばかり仰言いますの。タチヤーナ・アファナシエヴナまでが、かう仰言いますのですよ、——あれが黒ん坊に生れたのは返す返すも殘惜しいが、あれよりも立派な聟君などとは、望むだけでも罰が當る。」

「ああ、どうしよう」と、ナターシャは呻吟した。

「お歎き遊ばしますな、お嬢様」と、彼女の纖弱い手に接吻しながら侏儒が言つた、「たとひ黒ん坊の所へお出になつても、やつぱりお氣に召すままになされますよ。當節はもう昔とは違つて、且那方は奥方を閉籠めてはお置きになりませんもの。それにあの黒ん坊は中々のお金持とのこと、まるで山の端を上る滿月のやうに、ゆつたりとお暮しになれませうよ。」

「可哀相なヴァレリヤン」とナターシャは呟いたが、その聲は餘り微かだつたので侏儒の耳には達かず、彼女はただそれを察しただけであつた。

「それそれ、お嬢様」と、聲をひそめて侏儒は囁いた、「あの獵兵の伴のことをそれ程にお思ひ詰めになりさへ遊ばさなければ、何ぼ熱がお高くとも譫言にまでお口走りになることもなく、お父様のお腹立ちもなかつた筈。」

「何だつて」ナターシャは驚いて言つた、「私がヴァレリヤンのことを譫言に言つたの？　それを父様がお聞きになつて、それでお腹立ちなの？」

「それさへなければねえ」と侏儒は答へた、「今になつては、よしお父様にこの緣談は厭とおせがみ遊ばしても、きつとヴァレリヤンのせゐとお思ひになりますよ。詮もないことで御座いますわ。お父様のお心にお從ひなさいまし。どうせ物事は、成る様にしかなりませんもの。」

ナターシャはもう何も言はなかつた。心の秘事を父親に知られたといふ考へが、激しく彼女の氣持に影響した。今は唯一つの望が殘つてゐた。この厭はしい結婚の濟まぬ中に死なう——この考へが彼女を和ませた。悲しく力無くその魂は己れの運命に伏した。★

解題・略註

解題

十九世紀初頭の露文學は詩の世界では前世紀の相當豐かな遺產を承繼いだに反し、散文の方は頗る貧困を極めてゐた。プーシキン（Alexandr Sergeevich Pushkin, 1799—1837）が當時「わが國は韻文の外には文學表現の器を有たぬ」と歎じたのは決して誇張ではなかつた。その中で一八一八年に現れたカラムジン（N. M. Karamzin, 1766—1826）の『露西亞國史』（Istoria gosudarstva Rossijskovo）十二卷は十八世紀末の佛文學の聊か度を失した典雅高尙體を借りて彫琢を縱まにしたものであるが、これが當代露西亞散文を足下に拜跪せしめた觀があつた。この彫琢派に兎も角も對立してゐたものには、バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』（Adolphe, 1816）あたりの簡潔體から著しい影響を受入れてゐるヴィヤゼムスキイ公（P. A. Viazemskij, 1792—1878）の峻烈な批評文や、祖國戰爭の勇士ダヴィドフ（D. V. Davydov, 1784—1839）の雄健な文章などを數へるに過ぎず、到底彼とともに兩翼をなすと迄は行かなかつた。更に藝術的散文乃至小說になると以上の人々の作物に比べても大きな逕庭があつて、殆ど文學として顧みられて居ない。然しこの間にも、オシアン（Ossian, IIIc.）やローレンス・スターンに私淑の心を寄せた

浪漫派の青年らは、程なく出現するゴーゴリのため道を直くすることを怠らなかつた。この傾向の一番明かな代表者は、三〇年代の最も著名な小說家であり、またプーシキンの莫逆の友であつたベストゥジェフ（A. A. Eestudzev, 1797—1837. 筆名 Marlinskij）であらう。スコットの影響がまだ露文學に現れて居らぬ當時に、彼は佛譯を賴つて深く彼に傾倒し、その影響の下に輕妙な筆を揮つた。その彼が、「誰でも詩が書ける樣になつて此方、人々は最早詩に耳を傾けなくなつた。今までは其處此處に散り散りに聞えた呟きが、今や一つの叫聲に合さつた。曰く『散文を、散文を與へよ。水を、淸水を與へよ』」と書いてゐるのは、一八二五年前後の露文學界一般の渴望をよく表してゐる。

プーシキンも散文を渴望することにかけては何人にも引けを取らなかつた。しかし彼の素志が、その家庭小說と斷じたスコットの流儀に赴くことになかつた事は明かである。一般に彼が散文に手を染めた契機は、前に述べたカラムジンの『國史』であつたとされる。如何にも此の事實を疑ふことは出來ぬ。彼はカラムジンを當代露西亞第一の散文家と揚げてゐるし、またこの歷史家を通じて露西亞史への深い愛、そして深い民族愛を培つた。だがスタイルの側から見ると、彼はこの人の豐かな語彙やガリシズムを踏襲することに依つて、決してよい影響は蒙つてゐないと言へよう。彼の散文の一つの特長である句の均齊は、明かにカラムジンから承繼いだものだが、同時

に力めて「散文性」を嚴守しようとし、修辭學的な抑揚から奇蹟的に免れてゐる所に彼の全く別種の努力があり覺悟がある。彼は一八二二年に『スタイルに就いて』(O slogie) といふ覺書を書いたが、その中に見出される次の言葉はよくこの邊の消息を傳へる。「明確と清楚、これが散文の有つ第一の美點だ。散文はあくまでも思想を思想をと追求する。きらきらする表現は散文にとつて無用の業だ。」ここには既に後年ヴォルテールを指して良識的スタイルの好標本とした彼の姿が明瞭に出てゐる。また前に記したヴィヤゼムスキイ公の手になる『アドルフ』の露譯の完成を祝つて、これは「放肆、且つ利己的で、乾燥しながら尙夢想に强く牽かれる魂と、刺だたしく波立ち易い智とを二つながらに有つ時代と時代人の姿を、忠實に反映し得た稀な小說の一つ」であると述べ、そのメタフィジィクな表現樣式を「調和深く而も世俗的、屢々神來の聲を明かす」ものと指摘して勝れた理解を示した彼の姿もよく出てゐる。一口に彼の散文の調和と言つても、その中には以上のやうな二つの對立した力が相爭つてゐるのだ。だからその中に、或る人は佛蘭西流の小ざつぱりした明確さを見、或る人は「物質の抵抗力」を感じ、或る人は樣式化の美醜を云爲するのだが、此等の要素は孰れも彼の裡にあるのだ。それを融和して渾然としたスタイルに押上げようとした所に、荒地に露西亞散文の正しい礎を据ゑる爲努力した人の苦しい息遣ひがある。彼の散文が後に傳へた影響は大きい。露西亞の、レアリズム小說の開基をゴーゴリとするに勿論異議はないが、プーシキンの散文はこれとは獨立にレールモントフを經て、その後の殆ど總ての作家に健康な影響を投げてゐる。

『ピョートル大帝の黑奴』(Arap Petra Velikovo, 1827) は彼の試みた最初の散文作であり、カラムジン直傳の尙史精神の第一のあらはれでもある。彼は實在の曾祖父を中心に据ゑて、その最も得意とするピョートル大帝及びその時代を浮彫に仕上げる大歷史小說を目論んだのだ。この意味からこれは彼の散文作のうちその複稗への烈しい野心の思ふさまに流露した作品として重要な價値を藏してゐる。しかしこの作は六章と數行だけで永遠に完結されずに殘つた。何故完結されなかつたかに就いては、第一章から第二章への轉移、更に第三章への轉移の間に見逃せぬ作者自身の眼の搖ぎが明かな鍵を提供するであらう。プーシキンの鋭敏な心は、續く各章の動きが次第に起首のきびしい約束を裏切るのを感じたに相違ない。彼の潔癖はこの裏切りに堪へず筆を投じたのであらう。またそこには、散文小說といふ一新體を開いてそれを正しい道に置かうと企てた最初の人の肩にかかつた責任感の重さも、冥々のうちに手傳つてゐるのが感じられる。これが『オネーギン』(Evgenij Onegin, 1823—33) を十年間の不撓の努力ののちに遂に完成し得た詩人の、散文に於ける第一の企圖が遭遇しなければならなかつた運命と思ふとき、この未完作の露西亞文學史上に有つ意義は彷彿として浮び上ると思ふ。

『スペードの女王』(Pikovaia dama, 1833) はこの樣な小篇でありながらそのスタイルの簡潔と凝聚とによつて、プーシキンの散文作の中では『大尉の娘』(Kapitanskaia dochka, 1833—35) を頭に戴く他の一群と優に拮抗して、その努力の兩極を示す傑作である。そればかりでなく廣く露文學史を通じて獨特無二な一現象で、方々の國の文學に極めて稀に而も必ず見掛ける不思議な花のやうな作品に屬する。歐洲的の意味での單稗にこれほどの美しい達成を示したものはこの國の文學には他に見當らぬ。從つて彼我の間の交渉優劣が問題とならうと思はれるが、この作を怪奇な味ひの側から見ればそこにポーやホフマンの明かな影響を見ない譯に行かない。然しながらこの作はスタイルの素朴と柔軟に於て確かに別種の何物かである。またリーザを描く筆遣ひに、ミュッセあたりと一脈相通ずる情緒の深さも認められよう。然しながらこの作は簡潔と聚中力に於て確かに別種の何物かである。この作の價値と魅力はこの邊に探らなければなるまいと思ふ。つまりロマンティクな美を基調としながら終始冷嚴な刺笑を忘れず、古典のあらゆる制約を却つて驅使して流動性のある凝聚にまで高め得た所に、既に「露西亞的」な單稗の一典型としてこの作の確保する豐かな意義があるのだ。あのドストエーフスキイさへ感嘆の言葉を惜まなかつたと傳へられるこの作の價値は確かにここに發するのであらう。一八四三年にはじめて佛譯が出て以來、メリメもその嘆稱すべき譯筆を執り、最近ではジッドにまで移植の筆を染めさせたのも、恐

らくはこの魅力のさせる業であらう。なほ本篇の美しい裝ひとなつた七つのカットは、佛文學者某氏の御好意により挿入し得たものに係る。未見の同氏に厚き感謝の意を表す。

昭和八年夏

譯者

略註

スペードの女王

七 題詩　この物語の作者が非常に骨牌を愛したことは、除りにも有名な事實である。この詩も骨牌卓の緣の布のうへに白墨で記した、彼の處作であると傳へられる。

八 ミランドール　おそらく骨牌魔法の一種（Mirandol.）

八 ルテ　ファラオン戲に用ひられる特殊な「手」の名（Ronté.）

九 リシュリュー　佛蘭西の元帥、大宰相リシュリューの姪孫に當る　ルヰ十四世、「攝政期」、ルヰ十五世と三代の宮廷に活躍した才人で、その情史によつて有名（Armand du Plessis, duc de Richelieu, 1696—1788.）

九 ファラオン　バツカラに類する骨牌戲法（Pharaon.）

九 オルレアン公　佛蘭西大革命の立役者フイリツプ・エガリテを指す（Louis-Philippe-Joseph, duc d'Orléans, 1747—93.）

一〇 サン・ジェルマン伯　スレスヴイヒ生れの大山師　鍊金術師として佛蘭西露西亞を渡り歩いた謎の如き人物ルヰ十六世の陸軍大臣とは別人である（Comte de Saint-Germain, ?—1784.）

一〇 回想錄　その有名な『回想錄』十二卷は死後ライプチヒで、一八二六年から三八年までに刊行を了してゐる

一二 ソニカ勝ち　ファラオン戲に於けるあがり手の一種（Sonica.）

一三 ゾリッチ　女帝エカテリーナ二世晩年の寵臣　セルビヤの農家に生れ、露西亞の將軍に成上つた（Semion G. Zorich, ?—?）

一六 七十年代　一七七〇年代の露西亞は恰もエカテリーナ大帝の治の初期に當り、輕佻な佛蘭西謳歌の時代であつた

一八 水死人　この句は作者が伯爵夫人の口を藉りて、十八世紀初頭のユーゴーなどの佛蘭西浪漫派の惡趣味を諷したものと解されてゐる

二〇 ダンテの句　天堂篇第十七歌、五八——六〇行

二〇 葉子店　往時にはカフエの役割を演じたところの

二二 ルブラン夫人　ルヰ十六世の宮廷風俗を寫した佛蘭西の畫家　亡命して永く露西亞にあつた（Élisabeth V. Lebrun, 1755—1842.）

二三 ルロア　佛蘭西の名高い時計匠（Julien Leroy, 1686—1759.）

二三 モンゴルフイエの氣球　佛蘭西人モンゴルフイエ兄弟は輕氣球の發明者。一七八三年と翌年に有名な試驗飛行が行はれてゐる（Joseph-Michel et Étienne Montgolfier, 1740—1818；1745—99.）

二三 メスメルの磁氣　維納の醫師メスメルの初めて唱へた動物磁氣說（Franz A. Mesmer, 1733—1815.）

二四 お忘れ？　お心殘り？　メリメが自分の佛譯に附した脚註に據れば、これはマズルカに於ける慣行の由である　卽ちこの二語はそれぞれ一人の婦人の假の名であつて、この間を受けた男子は鸚鵡返しに孰れか一語を發言して、當つた婦人と組まなければならぬ。（Oubli ou regret?）

二四 王鳥鬘　十八世紀に一世を風靡した結髮の型（Oiseau royal.）

二五 稜餘り　分配を受ける札の一枚ごとに賭金を何倍かに（二倍乃至稀には三十倍にも）殖す行爲を「ペ」Paix と稱する　「ペ」を宣した者はその證據として札の稜を一つ折り曲げる　卽ち稜の折れ曲りの數は、賭金の高を示す大切なものであるから、放心の手に誤つて折られた稜（所謂「稜餘り」）を、チエカリンスキイは伸すのである。但し勝負が高潮に達した際には、稜餘りを正す行爲は問々當人の感情を害ね　重大な誤解の因となり易い　チエカリンスキイの態度が特に感動を頒める所以である（Lisluniij ugol.）

ピョートル大帝の黑奴

六五 イブラヒム　作者の母方の曾祖父である。彼はエチオピヤの或る小王の子に生れ、人質となつてコンスタンチノープルに在つたのを、露西亞公使が手に入れてこれを大帝に獻じた　骨董や怪物を好んだピョートルの愛を擅にしたこの黑奴は、一七一六年頃巴里に留學して兵術殊に築城學を修め、同二二年に歸朝後數年にして大帝の死に逢ひ、メンシコフ等の讒に依つて久しく數奇な運命に弄れたが、幼馴染の女帝エリザヴエータの代に再び用ひられて陸軍大將に昇り、漸くその晩年を全うし得た　彼の家庭生活は頗る惠まれず、最初に結婚した希臘女は十五年のあひだ彼を裏切り續けて、遂には「白い」●奴を生んで尼寺に入らねばならぬ破目になつた　作者の曾祖母はその後妻である　プーシキンは曾祖父から承繼いだ黑い血を寧ろ誇として、ここにその風貌を描かうとしてゐるが、イブラヒムの自傳的記錄は悉くその不遇の日々に失はれてゐるから、本篇中その私生活に關する部分は先づ典據を有せぬものの樣である。(Abram [Ibragim] Petrovich Gannibal, 1696—1781.)

六六 西班牙の役　普通には西班牙繼承戰役（1701—12.）を指すものと解されるが、彼の留學の年代を考へに入れるとこれはその後の何か他の小役と解すべきか。

六六 オルレアン公　ルヰ十五世幼時の攝政であつたオルレアン公フイリップを指す。その治世はルヰ十四世の治に對する反動期を形成し、ラスを重用して國家の財政を危くする一方、その放肆を極めた生活は國民道德の頽廢を招いた。(Philippe d'Orléans, le Régent, 1674—1723.)

六六 パレ・ロワイヤル　此の有名な宮殿は永くオルレアン公家の邸であつた。

六六 ラス　ルヰ十五世の幼時、所謂攝政期に殊に重用されたスコットランド出の財政家。彼の施設は佛蘭西を破產に導いた。(John Laws de Lauriston, 1671—1729.)

近代の雅典　四里。

六六 アルキビアデス　雅典の名將。特に優れた天稟に惠まれながら放縱に身を委ねる者の例に引かれる。

六六 リシュリュー公　九頁の註と同一人物。

六七 引用詩　ヴォルテール作「オルレアンの處女」より。ヴォルテールはプーシキンに大きな影響を與へてゐる。

六七 アルエ　ヴォルテールの姓。(Arouet, 1694—1778.)

六七 ショリュー　佛蘭西の優雅な詩人。(Abbé Guillaume de Chaulieu, 1639—1720.)

六七 フォントネル　佛蘭西の文學者。(Bernard de Fon'enelle, 1657—1757.)

六七 エカテリーナ　ピョートル一世の妃　一七一一年正式に妃を賞し　同二五年大帝の歿後は自ら位を繼ぎ　エカテリーナ一世を稱した（Ekaterina Alekseevna, 1684—1727.）

六七 リーザ　大帝の娘　後の女帝エリザヴエータ。その即位（1741）とともに、この林檎の緣を以てイブラヒムを逆境から救出することになる。(Elizaveta Petrovna, 1709—61.)

六七 オラニエンベウム　帝都を距る三十七露里、芬蘭灣の南岸にある町で、一七一四年ここに離宮が設けられた

六七 ポルタヴァの役　北方戰爭の中期即ち一七〇九年　ピョートルは南露ポルタヴアの附近で瑞典王カルル十二世の軍を潰滅した。

六七 メンシコフ侯　布衣の中より身を起し大帝の寵を得て元帥となり、また文武の政に重臣として勢威が振つたが、大帝の歿後は敵の讒に陷ひ不幸な晩年を送つた。(Alexandr Danilovich Menshikov, 1670—1729.)

六八 ドルゴルーキイ侯　大帝の寵臣　彼の登場はイブラヒムの歸朝の年と重複する。(Jakov Fedorovich Dolgorukij, 1659—1720.)

六八 プリュース　大帝の學術上の相談役として大功があつた　露西亞地圖を修し、またこの國最初の曆を編んだ。

(Jakov Vilimovich Brius, 1670—1735.)

八一 シェレメーチエフ　大帝の改革を助けて功があつた　ボルタヴアの役には總指揮官として活躍し元帥となつた。壯年の頃國外に留學してゐる　彼の出現もドルゴルーキイと同様矛盾がある　(Boris Petrovich Sheremetiev, 1652—1719.)

八一 ゴローヴィン　有名なネルチンスク條約 (1689) の締結者であり晩年外務大臣になつた Golovin 伯 (?—1706) の一門の人であらう

八二 フェオファン　ノヴゴロドの大僧正　羅馬に留學した　一七一六年大帝に招かれて相談役となり、最後の文化的改革に貢獻する所が多い。(Feofan Prokopovich, 1681—1736.)

八一 ブジンスキイ　個正。大帝の協力者　露西亞最初の俗語教本の著者　(Gavrill Bud-inskii, ?—1731.)

八二 コピエーヴィチ　大帝の協力者　算術　紅海、歴史などの教科書　文法書、イソップ物語などを編纂し發行した　(Ilia Fiodorovich Kopievich, ?—?)

八四 夜會　これはピョートル大帝が外國文物輸入の序でに　上流人士を集めて催した經濟夜會であるが、まだ社交に慣れぬ當時として、不參の者には罰を以て臨みその出席を强制した。(Assembleys.)

八八 太后ナターリヤ・キリーロヴナ　露帝フレクセイ・ミハイロヴイチの後妃、大帝の生母　(Natalia Kirillovna, 1651—94.)

九一 題詩　『ルスランとリユドミラ』(1817—20) はプーシキンが初めて試みた長篇譚詩、想を上代の口碑に採り六歌節約三千行　引かれたのはその第一歌一〇—一三行である

九二 ナルヴアの役　北方戰役の初年卽ち一七〇〇年　芬蘭灣南岸ナルヴアで瑞典軍がピョートルの軍を一蹴した

九七 ムショー云々　それぞれ當該佛蘭西語の露西亞譯り

一〇四 浦島、鬼ケ島　原文は此處に、ボヴア・コロレーヴイチとエルスラン・ラザレーヴイチの二つの名を列べてゐる。熟れもこの國の人口に膾炙したお伽噺の主人公である

一一七 末尾　第六節はここに終り　續く第七節では筆を轉じて、今まで影の人物であつた瑞典士官を前景に引出すかに見えるが、僅か次の數行を以て永遠に斷たれてゐる　——

七

ルジェーフスキイの館の、玄關を出て右へ折れると、窓の一つしかない小房がある。毛布で蔽うた質素な寢臺の前に樅材の小卓が置かれ、その上には牛蠟が燃え譜本が開けてある。壁間には古びた青の軍服と、古さではそれに劣らぬ三角帽とが掛けてあり、更にその上には馬上のカルル十二世を現した粗惡な版畫が、三本の鋲で留めてある。フルートの音がこの佗しい住居にひびいてゐた。小房の一人ぼつちの住み手である俘の舞踏教師は、夜暗に黄木綿の部屋着姿で、自分の唇に吹く瑞典マーチの陽氣で古めかしい節廻しに、過ぎた青春の日を呼起しながら、冬の宵の無聊を慰めるのである。まる二時間ほどの練習が濟むと、瑞典人はフルートを傍いて圖に入れ、寢仕度をはじめた。するとその時、扉口の掛金が上がつて、一人の美青年が長身を軍服に包んで、その部屋へはいつて來た。瑞典人は愕いて起ち上つた。

「僕が分らないかなあ、グスターフ・アダーム・イチ」と、年若い來訪者は感動に聲をうる

7139

ませて言つた、「君から瑞典式の操練を數へて貰つた、あの子供を憶えてゐないかなあ。それ、一緒に玩具の大砲を射つんだと言つて、すんでの事でこの小部屋に火事を起すところだつたぢやないか。」

グスターフ・アダームィチはまじまじと相手の顏を見詰めた。……

「いやあ、これは」と、やがての果に彼は青年を抱きしめながら、瑞典訛り丸出しで絕叫した、「御機嫌よろしう。して何時歸つて見えたかな。まあまあお掛け、旦那さん、話しておいで。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昭和八年八月廿日印刷
昭和八年八月廿五日第一刷發行
昭和廿二年九月十日印刷
昭和廿二年九月十五日第十二刷發行

スペードの女王
定價拾六圓

譯者　神西清（じんざい きよし）

發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎

印刷者　東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地　山田一雄

發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　岩波書店

配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社　會員番號A一〇九〇〇四號

本製・刷印堂化大社會式株

1916
98
F83
P97
9b

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。昔ては民を愚昧ならしめるために藝術が最も欲き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の壟占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に欲歿の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揭言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の友に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より忘して來る計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を選めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は全力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其成就のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終